みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Environmental Exploitation on the Eastern Slope of the Central Andes : A Case of Amarete, Northwestern Bolivian Highland

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 木村, 秀雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004410

ボリビア北西部・アンデス東斜面のケチュア農村における環境利用

――アマレテ村の事例――

木　村　秀　雄*

Environmental Exploitation on the Eastern Slope of the Central Andes —A Case of Amarete, Northwestern Bolivian Highland—

Hideo Kimura

Amarete is a Quechua community situated on the Eastern slope of the Central Andes of Bolivia. The Central Andes is a region where varied natural environments align along steep mountain slopes. This article deals with the native exploitation of this environments, focusing mainly on land use.

In Amarete arable lands are divided according to the altitude into two parts. There are the upper and the lower, as in the other Andean communities. In the ideal of the Amaretean people, the former is used for producing potatoes, and the latter for maize. But besides these two crops a large quantity of tuber crops, like oca and isaño, wheat and barley, beans and peas, are also cultivated.

The rotation of crops is done both in the upper and lower parts, and the same crop is not cultivated for two in succession years. In the upper part of the cultivated field the rotation cycle is seven years, and selection of the crop to be sown and sowing in one rotation unit are controlled by the entire community. In the lower part, crop rotation is also practiced but this is not subject to communal control.

Two or more separate tracts of land are combined as a set. A rotation unit (*kapana*) is composed of one large tract of land and smaller annex pieces. In land tenure to each unit of arable land (*sayaña*) some smaller and poorer quality lands (*chiki* or

* 亜細亜大学経済学部，国立民族学博物館共同研究員

waqe) are attached. This division of land is a device for reducing crop damage by the bad weather and for preventing the total loss of the agricultural production of a family or the whole community.

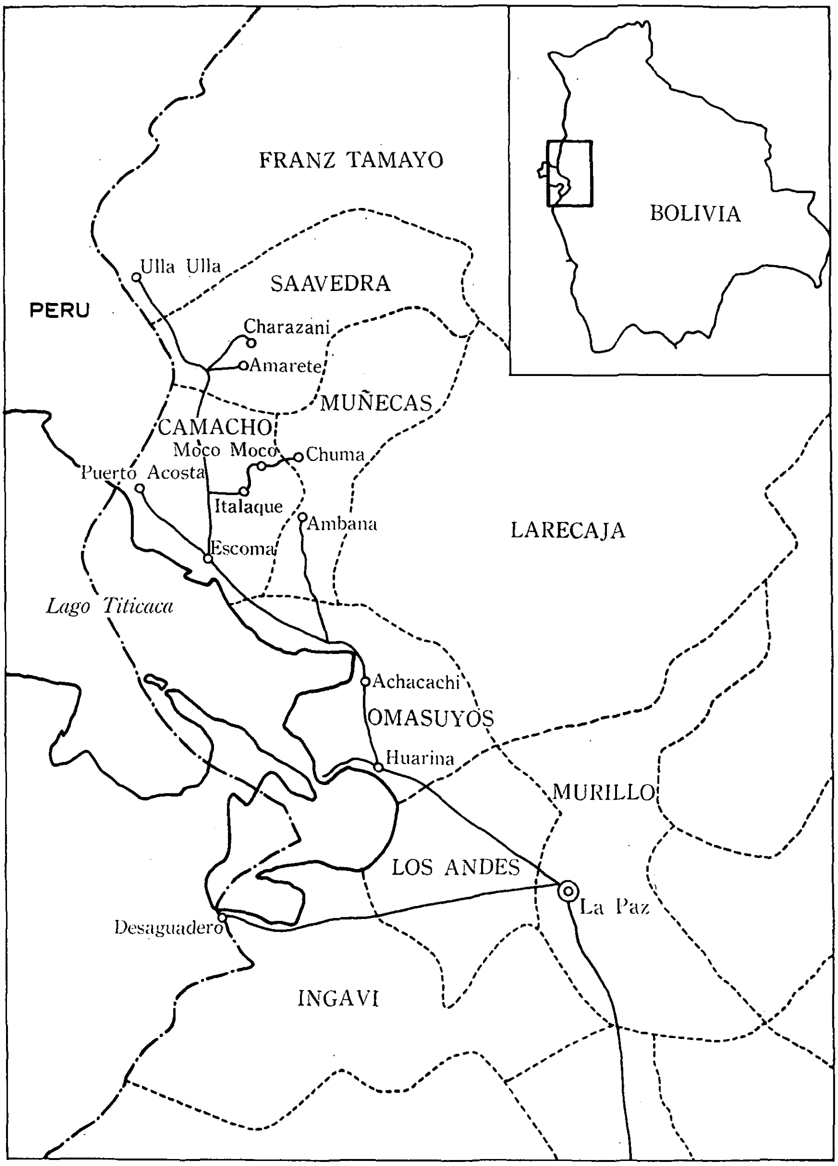
Historically the traditional forms of land use, for example, the rotation system of *kapanas*, land tenure and land inheritance, seem to have changed. This could have been caused by the invasion of the outsiders and the Bolivian Agrarian Reform commenced in 1952. The loan of lands exists between Amarete and its annex villages where the arable fields are scarce, as well as between Amarete and other villages of the Charazani valley where manpower is lacking.

1. はじめに
 1.1. 調査概要
 1.2. 報告の前提
2. アマレテ概要
 2.1. 地理的環境
 2.2. 社会構成
 2.3. 農耕技術
3. ジャガイモ耕地（カパナ）
 3.1. 耕地の高度による二分
 3.2. カパナにおける作物ローテーション
 3.3. 大カパナと小カパナ
4. トウモロコシ耕地（パホス）およびその他の耕地
 4.1. パホス
 4.2. 放牧地
 4.3. 早生ジャガイモ栽培地
5. 土地所有の形態
 5.1. サヤニャ
 5.2. チキまたはワケ
 5.3. 土地所有
 5.4. 土地の相続
6. 土地の貸借・共同労働
 6.1. ワキ
 6.2. チキ
 6.3. 土地の種類としてのチキ・ワケと貸借としてのチキ・ワキ
 6.4. 牧民に対する土地の貸与
 6.5. 共同労働
7. おわりに

1. はじめに

1.1. 調査概要

本稿は，昭和58年度文部省科学研究費海外学術調査補助金による現地調査「中央アンデス農牧民社会の民族学的研究――ボリビア高地の環境利用と異民族間関係」(研究代表者：友枝啓泰・国立民族学博物館助教授）の分担研究として，ボリビア (Bolivia) 北西部ラパス県 (Departamento de La Paz) バウティスタ・サーベドラ郡 (Prov-



地図1　ラ パ ス 県 主 要 部

incia Bautista Saavedra) アマレテ地区 (Cantón Amarete) で行なった現地調査の報告である。ボリビア滞在は1983年６月から10月までであり，そのうちアマレテにおける調査期間は正味約３カ月間である。我々が調査地選定のために行なった予備調査においてアマレテを初めて訪れたのは６月下旬であるが，その時点では，すでにジャ

ガイモの収穫はほぼ終了し，オカの収穫作業続行中であった。アマレテに住み込んで実際に観察した農作業は，ムギ，マメ，トウモロコシの収穫からオカの植え付けまでであり，ジャガイモの収穫・植え付け作業やオカ以外の農作物の播種・植え付け作業は観察することが出来なかった。

筆者にとって今回の調査は初めてのアンデス調査であり，調査地アマレテ地区の中心集落アマレテの規模と調査期間を考え合わせて，分担テーマである社会組織の調査に今回すぐ着手することは困難であると判断した。そのため，アンデス社会理解のひとつの前提条件となると考えられる環境利用の問題を先ず調査の中心に置くこととし，その後社会組織の調査に進むという方法を取った。しかし残念ながら社会組織については，未だ報告としてまとめあげるだけの資料の集積がなされていないため，今回の報告においてはアマレテの概要記述の一部に留め，報告の中心テーマとしては土地利用の問題を取り上げることとした。

1.2. 報告の前提

今回調査を行なったアマレテは中央アンデス東斜面に位置する。中央アンデス東斜面は，緯度上は亜熱帯に位置しながらも，標高 5,000 m 以上から標高 3,000 m 以下まで，標高に従って様々に異なった環境条件が現われ，多様な環境が急峻な斜面に沿った狭い地域に併存する地帯である。この多様な環境をひとつの社会がいかに有効に利用しているかという問題が，アンデス研究の大きなテーマであった。

この問題の研究に大きなインパクトを与えたのが，ジョン・ムラ（John Murra）による「垂直統御（vertical control）」という概念の提出であった［Murra　1972］。ムラの立論の基盤となったのは民族誌ではなくエスノヒストリーであったが，ムラの概念提示以降，現存する伝統的アンデス農民の環境利用の調査が積み重ねられて来た。しかし民族誌資料の蓄積は未だ十分とは言えず，今後も実証データ集積の作業が継続されねばならない。その意味で，本稿におけるアマレテ・ケチュア農民の環境利用の資料提示はアンデス研究に寄与できるのではないかと考える。

本稿がめざすものを明示するためには，まずムラのいう「垂直統御」と「垂直利用」を別の概念と考えておくことが必要であろう。アマレテの人々はアンデス東斜面の垂直に連なる多様な環境を利用している。アマレテの環境利用に，ブラッシュ（Stephen B. Brush）による垂直統御の類型［Brush　1977: 10–16］をあてはめてみれば「圧縮型（compressed type）」ということになり，ルパカのような「列島型（archipelago type）」ではない。圧縮型は大貫良夫のまとめに従えば，「土地の傾斜が急で，自然区

分帯が相接して連続的に分布する。そして，その分布の両端の距離が比較的小さい。集落はこの両端のほぼ中間に位置していて，どちらの端にもおよそ一日あればゆきつくことができる。そして村人は，常に上下に動きながら，生産活動に従事する」[大貫 1978: 720] ものである。

大貫良夫のいうように，単に多様な環境を複合的に開発しているというだけでは，それは別にアンデスに特有なものではなく，「強いてアンデスに特有なものといえば，比較的規模の大きい列島型しかない」[大貫　1978: 729]。アンデスにおける環境利用は，亜熱帯という緯度上の位置と，高山地帯から低高度の海岸地帯や森林地帯へと下る急峻な斜面の存在という地理的な条件によって，多様な環境が近接して存在し，住民がそれを同時に利用できるという点に特徴があるのである。その意味で環境利用だけに着目すれば，ムラのいうインカ帝国の基盤として政治的意味をも含めた「垂直統御」は直接には視野にはいってこない。本稿における報告は，耕地の配分と利用法のみを扱うものであり，アマレテの環境利用を直接に「垂直統御」の問題として取り扱うものではなく，アマレテ集落周辺の斜面に展開する階段状をなした耕地の利用に視点を限定しているわけである。アンデス農民の環境利用の特性は，環境条件並列における「垂直性」にあり，本稿において追究するテーマはあくまで環境利用のひとつのタイプとしての「垂直利用」の問題である[1]。

そして，本稿の範囲はアマレテの事例の個別報告に留まるものであり，中央アンデス農民の環境利用の共通性を特別に念頭においてはいない。しかし，比較を視野に含めていないといっても，周辺地域で報告された類似の事例を無視することが出来ないのは当然であり，本稿ではアマレテの事例が全くの孤立例ではないことを示すために，カアタ，チャラサニなどアマレテに隣接する谷における事例と，すこし離れてはいるが同じラパス県のアンデス東斜面に位置するアンバナの事例も合わせて紹介することにしたい。

2. アマレテ概要

2.1. 地理的環境

ラパス県の自然環境は，標高 6,000 m を超えるアンデス東山脈の高山帯から，東

1) この垂直統御及び垂直利用の概念規定については，本館共同研究会「アンデス・ヒマラヤ・アルプス——交換と交易——」においてしばしば議論がたたかわせられ，両概念の区分の重要性が指摘されて来た。ここまでの筆者の議論はこの指摘から大きな示唆を得ている。

西両山脈間の高原地帯，東そして北へ向かって急激に高度を下げる渓谷地帯，そしてその先にひろがるアマゾン川の支流マデイラ川上流の熱帯林地帯と，非常に多様である。アンデスの多様な自然環境は多くの論者によって区分されているが，人間の居住する環境は高度に従って上から，プナ (puna)，スニ (suni) またはハルカ (jarca)，キチュア (quichua) またはケチュア (quechua)，ユンガ (yunga) に分けられる。アマレテ住民による区分は，プナ，バイエ (valle)，ユンガの三区分である。この区分ではスニとキチュアが区別されておらず，その両者をまとめてバイエというスペイン語による名称が導入されており，アマレテの住民は自らをバイエの住民 (valle runa, valluno) であると認識している。

ラパス県の総面積は 133,985 km² である。同県は18の郡に分けられているが，そのひとつバウティスタ・サーベドラ郡はアンデス東山脈からアマゾン川へと下る東斜面を中心とする地域で，アマレテ (Amarete)，クルバ (Curva)，カリハナ (Carijana)，ミゲル・デ・チュリーナ (Miguel de Chullina)，フアン・ホセ・ペレス (Juan José Pérez)，ラモン・ゴンサーレス (Ramón González) の 6 地区 (Cantón) に分けられている。郡の中心地はフアン・ホセ・ペレス（チャラサニ Charazani）であるが，アマレテ地区がフアン・ホセ・ペレス地区をしのいで最大の人口を擁する。国立統計局 (Instituto Nacional de Estadística) の1976年の統計によれば郡総人口は10,119人，アマレテ地区総人口は3,630人，中心集落アマレテが1,454人である。

アマレテは南から北に流れてチャラサニ川 (Río Charazani) に合流するアマレテ川 (Río Amarete) の左岸，標高 3,850 m 地点にある。アマレテにおいてはアマレテのみをリャフタ (llaqta) と呼び，その他の属村はアイユ (ayllu) と呼ばれて区別されている。アマレテ川の右岸には，上流からムユパンパ (Muyupampa)，ホタオコ (Jotahoco)，アティキ (Atiqui)，ビスカチャニ (Viscachani) が，左岸にはチャカワヤ (Chacahuaya) という属村が散らばる。標高 4,600 m の峠を東に越えた隣の谷には，ワト (Huato)，サイワニ (Sayhuani)，サピ (Sapi) という属村がある。ワトの谷とサイワニの谷はサピで合流し，アマレテ川とチャラサニ川の合流点の下流でチャラサニ川に合する。アマレテの谷から分水嶺を南に越え，チチカカ湖 (Lago Titicaca) に注ぐスチェス川 (Río Suches) へ続く高原には属村リャチュアニ (Llachuani) がある。また，アマレテ川の中流にはスカ鉱山 (Mina Suka) という操業中の小さなスズ鉱山がある。

アマレテ地区の周辺を見渡してみると，まずアマレテ川とチャラサニ川の合流点対岸の斜面上部にチュリーナの集落がある。またチャラサニ川はアマレテ川との合流点

上流では数本の支流に分かれた大きな谷間を形成しており，そこにクルバ，フアン・ホセ・ペレス，ラモン・ゴンサーレスの各地区に属する集落クルバ，チャラサニ，チャハヤ (Chajaya)，ニニョコリン (Niñocorín)，カアタ (Kaata)，インカ (Inka)，サカナコン (Sacanaqón) 等が点在する。またサピの谷とチャラサニ川の合流点の下流にはカリハナ地区に属するカリハナの集落があり，更に下流へと下るとバウティスタ・サーベドラ郡を抜けて，カマタ (Camata) の集落に達する。カリハナやカマタはすでにユンガ地帯に位置し，オレンジ，バナナ等の熱帯果実の供給を通してアマレテと伝統的なつながりを維持している。

アマレテの南側の分水嶺にそって自動車道路が走っており，それを西北に向かうと広い高原地帯が開け，バウティスタ・サーベドラ郡を抜けると，この地方におけるアルパカ飼育の中心であるウチャウチャ (Ucha Ucha)，ウリャウリャ (Ulla Ulla) 等の集落に達し，これらプナの住民とアマレテ住民は農産物と畜産物の交換を通して互いに結びついている。また，その道を途中で左にとるとペルーとの国境となっているスチェス川に出，河岸のタルカニ (Tarucani) においては週1回国境をはさんで定期市が開かれ，アマレテの住民もしばしばそれに参加する。また国境を越えてペルー領のワンカネ (Huancané) やフリアカ (Juliaca) までアマレテの住民が交易や家畜の買付けに出掛けることがある。

アマレテへの交通路は首都ラパスからチチカカ湖東岸をペルー国境へと向かう道路からエスコマ (Escoma) でわかれてウリャウリャへの道をとり，標高 4,350 m の峠プマサニ (Pumasani) から谷にそってアマレテへと下る自動車道がある。この自動車道はアマレテの集落を通ってスカ鉱山まで続いている。プマサニからアマレテの村へは定期バスは直接入って来ないが，チャラサニへはバスが入っており，途中プマサニでバスまたはトラックを降り，後は徒歩で村に下るのがアマレテに入るもっとも一般的な方法である。アマレテからエスコマ・ラパス方面に向かうには，高原の自動車道路まで上り，通りかかるバスやトラックをつかまえるのが通常のやり方である。また，スカ鉱山へは不定期にトラックが入るためそれに便乗して村を出ることも可能である。

2.2. 社　会　構　成

アマレテ地区にはケチュア語を話す住民とアイマラ語を話す住民が併存している。ボリビアにおいて一般的に高原地帯アルティプラノの住民はアイマラ語であり，ケチュア語を話すのは渓谷地帯バイエの住民であるが，アイマラ語圏とケチュア語圏の境界は谷によって異なる。アマレテより南のイタラケ (Italaque)——モコモコ (Moco

Moco) の谷やアンバナの谷などでは谷のかなり下部までがアイマラ語圏であるのに対し，アマレテではアイマラ語を話すのは上部のリャチュアニ，ムユパンパ，ワトの集落に限られ，アマレテを始めとするその他の集落においてはケチュア語が話される。しかし，そのケチュア語はアイマラ語の影響を強く受け，またアマレテの男性の多くはアイマラ語も話すことが出来る。男性は程度の差はあれスペイン語を話す者が多いのに比べて，女性の場合は若者など一部を除いてスペイン語・アイマラ語を話せない者の比率が高い。

アマレテは尾根の張り出しの平坦な部分に家屋が密集し，そこから約 1 km 上方にチャカワヤがある。アマレテは農地改革以来人口が減少していると言われるチャラサニと比べても人口密度が高く，他のボリビアの農村でしばしば目にする空き家の数が少ない。その結果アマレテはバウティスタ・サーベドラ郡で現在最大の人口を誇る集落となっている。アマレテの詳しい歴史については未調査であるが，現在教会のある場所で多くの人骨が掘り出されたという話や，現在でも家の新築中に古い土器や木製品が発掘されること，集落の周辺にチュリュパ (chullpa) であると言い伝えられている石積みが残っていることなどを考え合わせると，かなりの歴史を持った集落であることは確かであろう。

村の中央広場の一角に教会と地区行政機関の事務所があり，中央広場周辺はアマレテ外から移入しアマレテにおいて強い勢力を持つベシーノ (vecino) と呼ばれる人々によって占められている。中央広場から墓地へと続く街路によって村は伝統的に上

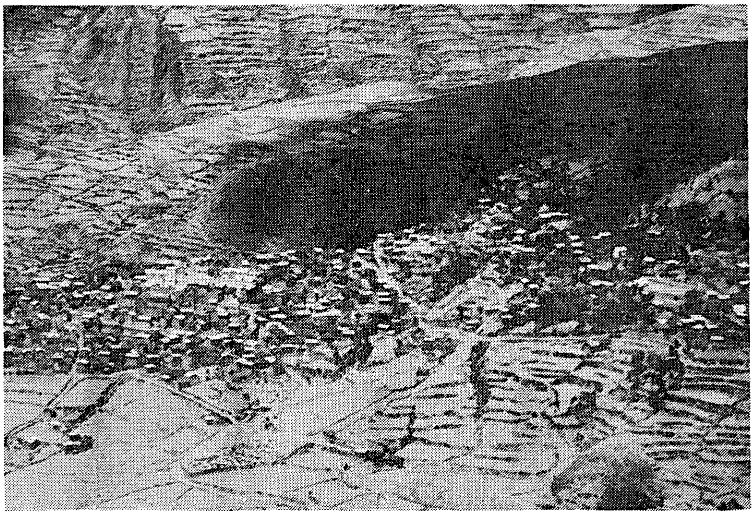


写真1　アマレテ全景

表1　Prov. Bautista Saavedra 人口・世帯数

	人口	男	女	世帯
Amarete 地区	3,630	1,789	1,841	902
Amarete 村	1,454	677	777	374
分散	2,176	1,112	1,064	528
Curva 地区	1,655	686	969	496
Curva 村	342	138	204	110
分散	1,313	548	765	386
Carijana 地区	484	259	225	147
分散	484	259	225	147
Chullina 地区	403	207	196	110
Chullina 村	403	207	196	110
J. J. Pérez 地区	3,327	1,619	1,708	891
Coata 村	508	241	267	136
Charazani 村	503	256	247	149
分散	2,316	1,122	1,194	606
R. González 地区	620	270	350	179
Chajaya 村	231	104	127	71
分散	389	166	223	108
総計	10,119	4,830	5,289	2,725

写真2　中央広場

(janan) と下 (urin) に二分されており，現在では janan がサン・フェリペ (San Felipe), urin はサン・イキ (San Yqui) と呼ばれている。サン・フェリペの上部はアポロワヤ (Apolowaya) と呼ばれる独立した一角を形作っており，これにチャカワヤを加えた，サン・フェリペ，サン・イキ，アポロワヤ，チャカワヤの4つがアマレテを構成する4区域 (barrio) となっている。

アマレテ地区には autoridad política の名で呼ばれている行政機構があり，最高責任者コレヒドール (corregidor) 以下司法官フエス (juez) 等の役職者が揃い，郡行政機構の下部機構となっている。それとは別にシンディカート (sindicato) と呼ばれる農民組合の下部組織があるが，これは村の伝統的な行政機構を改組したものであり，現在でもシンディカートが伝統的な農耕儀礼を主催する。このアマレテのシンディカートは上記の4つの区域全体にひとつ存在し，ホタオコ，アティキは独立のシンディカートを持っている。サピとサイワニは集落の規模が小さく同じ谷筋を共同で利用しているためひとつのシンディカートを持つ。

アマレテの家屋は殆どすべて2階建であり，1階の土間にベッドを置いたり1部分に板を張り渡して寝床にしたりしている。炊事場は同じ建物の中にある場合と，別棟になっている場合とがある。2階は多くの場合倉庫となっている。壁は土壁であり，屋根は伝統的には草ぶきであるが，トタン屋根が普及した結果現在では両者が混在している。

アマレテにおける最も一般的な家屋配置は，中庭を数軒の家が取り囲む形のもので

写真3　カ　ン　チ　ャ

ある。この中庭をカンチャ (cancha) と呼び，ひとつのカンチャに面した家々に住む人々をカンチャ・マシ (cancha masi) と呼ぶ。カンチャ・マシはしばしば別々の家を構えた父と息子たちや，父親同士が兄弟であったイトコたちのような近親者によって構成されるが，その構成員は必ずしも近親者のみとは限らない。親族・姻族関係が全くない人々が集まってひとつのカンチャ・マシとなっている場合もある。

カンチャにはカビルド (cabildo) と呼ばれる場所があり，カンチャの統合の象徴となっている。そこには，カンチャ・マシの一員が病気になった時や家を改築する時などに，捧げ物がなされる。このことから考えてもカンチャ・マシは重要な社会集団である可能性があるが，現在のカンチャ・マシは必ずしもひとつの共同単位をなしているとは限らない。また，兄弟も必ずしも同じカンチャ・マシとは限らず，ひとつの家族が相続や購入の結果数箇所に家を構えていることも珍しくない。そのため，カンチャ・マシのメンバーの共同性は場合によっては非常に低い。また，これは農作業や屋根ふきなどの労働の共同単位であるとは限らず，ある家族が祭の主催者になるなど役職についたとしても，カンチャ・マシの他のメンバーが必ず協力するわけでもない。このカンチャ・マシの性格については調査が不十分なのであるが，特に農地改革後に社会の共同性がうすれ，人々が個人主義化したことを想定すると，これがカンチャ・マシに共同性が低いことの原因の一部であるかもしれない。

兄弟姉妹の絆以外には，アマレテにおいて明確に分離できる親族集団は存在しない。友枝啓泰はケチュア農民の社会関係における柔軟性を指摘しているが [友枝　1983: 203–204]，アマレテにおいても親族・姻族の範囲や行動規範は明確であるとは言い難い。父・子・兄弟・姉妹・パドリーノ・アイハード・婿など，非常に近い親族・姻族・擬制親族に対しては，協力・奉仕の義務等の行為規範が存在するにしても，親族関係・姻戚関係・擬制親族（コンパドラスゴ）・近隣関係・友人関係などを選択して利用するという柔軟性がアマレテ住民の社会関係にも存在すると思われる。

父方・母方を問わず同姓のものは親族であると見なされ，同姓のものと結婚することは出来ない。アマレテの結婚には同棲 (sirwinakuy) の段階と正式な結婚 (kasarakuy) の２段階がある。正式な結婚は，教会での結婚式，役場への届け，村の中での披露宴を必要とし，正式な結婚後は離婚することは出来ない。それに対して，同棲は正式なものではないため，解消することが出来る。この期間に夫は妻の一家に奉仕する義務があり，同棲期間は一種のテスト期間である。この同棲期間に子供が生まれた場合，そのまま正式に結婚すれば子供は夫の正式の子供となるが，正式に結婚することなく離別した場合には子供は母親によって引き取られ，父親は子供に対して権利も義務も

生じない。アマレテにおける配偶者選択の地理的範囲に関しては，詳しい資料を持ち合わせていないが，調査した範囲では結婚は殆どがアマレテ（チャカワヤを含む）内で行なわれており，その他にはサイワニ，サピ，アティキ，ホタオコの住民との結婚が少数見いだされるのみである。アルティプラノの住民やアマレテ地区以外に住む人々との結婚は殆どないと思われる。

擬制親族関係が結ばれる契機は洗礼と結婚である。洗礼においては子供の代父母はしばしばアマレテ外から選ばれる。その際にはしばしば父親の交易相手であるアルティプラノの住民が選ばれ，父親が自らの社会関係を拡大・強化するために擬制親族が結ばれると考えてよい。そのため，子供にとっては洗礼の代父（パドリーノ）は自分が成長しても顔を知らない相手であったりする例もあり，子供と代父の関係（パドリナスゴ）はあまり重要でなく，ここで重要なのは父親と代父の関係（コンパドラスゴ）である。他方，結婚における代父はそれからの一生重要な存在となる。代父に対しては屋根ふき・祭・葬式など様々な場面で奉仕しなければならない。この代父に対する奉仕は妻の父に対する奉仕と比肩できる重いものである。結婚を契機とする擬制親族はいつも身近にいる有力者との間に結ばれることが多く，遠いアルティプラノの住民との間に結ばれることは少ない。ここにおいて重要なのはパドリナスゴでありコンパドラスゴは重要性が相対的に低い。このように，一口に擬制親族といっても，洗礼を契機とするものと結婚を契機とするものとでは性格が大きく異なる。

アマレテの住民はオリヒナリオ (originario) とアグレガード (agregado) の2つのカテゴリーに分けられている。オリヒナリオはアマレテ創設当時の住民の子孫と考えられている人々であり，アグレガードはその後に何らかの理由でそれに付け加わった人々である。オブリタス (Enrique Oblitas Poblete) は，アグレガードをインカによってアマレテ住民の一部として編入された人々及びその後コレヒドールたちによって付け加えられた人々であるとしている [Oblitas Poblete 1978: 317]。このオリヒナリオとアグレガードの区分は，スペイン征服後の revisitas の記録にも存在しており，オブリタスによれば税の額はオリヒナリオがアグレガードの2倍であり，それにつれて認められる所有地の面積も2倍であったが，現在では両者は混ざり合ってその差が明確でなくなり，土地の所有の権利や税の支払いの義務においても差が無くなっている [Oblitas Poblete 1978: 317–318]。アマレテにおいても現在では両者の差は日常の場面においてはほとんどわからないが，万聖節 (Todos Santos) においては，両者の衣装がはっきりと違い，いまだに区別が存在し続けている。

2.3. 農耕技術

アマレテにおいて用いられる農業技術はアンデス東斜面の他の農民社会と基本的に変わりがない[2)]。そのためここでは詳述するのを避け，簡単にまとめておくに留めることとする。

耕地は斜面に石積みを施して区画された階段状耕地であり，急傾斜地では一枚の農地の面積は極めて小さい。そのため現在に至るまで，トラクター等の農業機械は言うに及ばず，牛にひかせる犂ユンタ (yunta) も用いられていない。主として用いられるのは土をおこすための踏み鋤 (taclla)，小型の鍬 (raucana)，土くれを叩き潰すための木槌状のもの (uspi) である。

アマレテにおいては近接した区域の耕地においては播種・植え付け・収穫はほぼ同時に行なわれる。作業日時の明確な指定が行なわれるわけではなく，人々は周囲の様子を見ながら大体そろって農作業に出掛けるのである。収穫がひとりだけ遅れると刈り跡放牧の家畜によって農作物が食べられてしまうため，周囲より遅れることは出来ないのである。

施肥はジャガイモ耕地においては耕作の前に数回に分けて行なわれる。アルティプラノのアルパカの糞を運んで施すこともあるが，主力となる肥料はヒツジの排泄物である。施肥の時期になるとヒツジを夜，畑で寝かせて施肥を行なうが，家屋に隣接する家畜囲いに貯った家畜の糞を畑に運んで施すこともある。

主要作物は，ジャガイモ，オカ，トウモロコシ，オオムギ，コムギ，カラスムギ，ソラマメ，エンドウであり，その播種・植え付けと収穫時期の対応表を（表2）に示した。

表2　アマレテ農事暦

作物名	播種・植えつけ	収穫
ジャガイモ	9～10（月）	6（月）
オカ	9	7
ソラマメ	10	7
エンドウ	12	7
カラスムギ	12	7
オオムギ	12	7
コムギ	12	7
トウモロコシ	11	7

2) 山本紀夫のマルカパタにおける報告などを参照 [山本　1980: 161-168]。

3. ジャガイモ耕地（カパナ）

3.1. 耕地の高度による二分

アマレテの農地はアマレテ住民による区分法に従えば，2つの区域に大別することができる。第1の区域はカパナ (kapana)，第2の区域はバホス (bajos) またはワホス (huajos) と呼ばれる。この区分の基本は，カパナは「ジャガイモのとれるところ」，バホスは「トウモロコシのとれるところ」という生産物の相違である。アマレテが位置するアンデス東斜面の生態学的条件においては，ジャガイモの栽培可能地とトウモロコシの栽培可能地は高度によって分けられる。アマレテにおいては両耕作地の境界が標高によって厳密に決められているわけではないが，両者のおおまかな境界高度は約 3,500 m である。

この「カパナ=ジャガイモ」「バホス=トウモロコシ」という定義は，アマレテの住民がカパナとバホスを対比して定義するための理念化された表現であり，現実の農産物がこの2種類に限られるわけではなく，両区域でジャガイモまたはトウモロコシだけを栽培しているわけでもない。両作物の他にカパナでは，オカ，イサニョ，オユコ，オオムギ，コムギ，ソラマメ，エンドウマメ等を栽培し，バホスではオオムギ，コムギ，ソラマメ，エンドウ，ラカヨテ，ヤコン等を栽培する。

アマレテにおいては作物を連作しないのが基本的なやりかたであるので，カパナでジャガイモを，またバホスでトウモロコシを連作することはない。ジャガイモは連作を嫌うので当然としても，トウモロコシの連作は可能なはずである。事実，ペルーのケチュアにおいてはトウモロコシは連作するのが普通である。しかし，アマレテにおいてはトウモロコシも連作されない。そのため，アマレテにおけるトウモロコシの全作物生産量に占める割合はペルーのケチュア農民と比較して相対的に低いと推定される。

アマレテ住民の食事内容を調べてみると，食物はひとつの農作物には片寄っておらず，ジャガイモ，オカ，トウモロコシ，ムギ，マメをまんべんなく食べていると言うことが出来る。調査がオカの収穫から植えつけまでの約4カ月にしかわたっておらず，食事内容の季節的変化については不明であること，及び調査年は例年にない少雨のためにジャガイモの収穫が少なかったという特殊事情が存在することの2つの理由から，アマレテ住民の食事にしめる各農作物の比率については，調査時の食事の状況をアマレテにおける一般的状況であるとするのは危険である。しかし，観察した限りにおいては，食事におけるオカの比重が高いことは確かであり，後述の作物ローテー

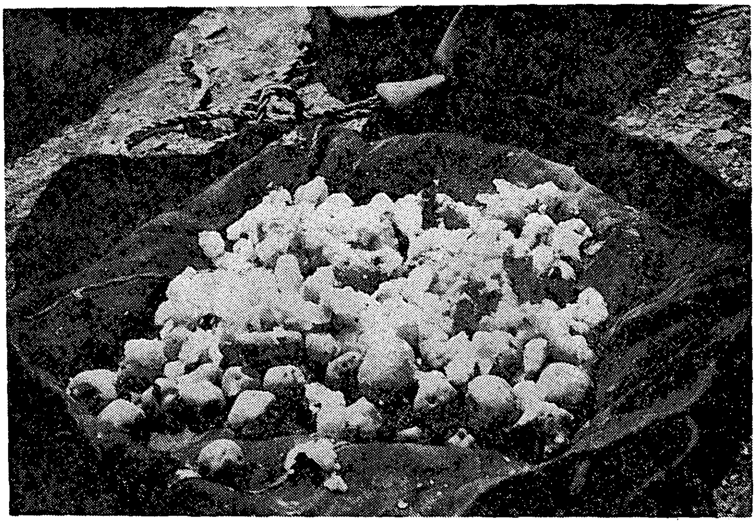


写真4　食　　事

ションのあり方から考えても，アマレテにおけるオカの重要性を指摘することは出来よう。

そしてまた，食事内容からみてトウモロコシがアマレテの栄養摂取の大きな部分をしめているとも考えにくく，現在消費されるアルコール飲料の大きな部分をエチルアルコールが占めており，トウモロコシからつくられるチチャが殆ど飲まれていないことも，トウモロコシの重要度が相対的に低いひとつのあかしである。

オオムギ，コムギなどは新大陸起源の栽培作物ではなく，外部から持ち込まれたものである。それ故に，かつてはアマレテにおいても現在より多量のトウモロコシが栽培されていた可能性があり，それを肯定するインフォーマントの情報もある。しかし，アマレテの現状に基づいて言えば，アマレテ住民の意識の上ではカパナがジャガイモ耕地，バホスがトウモロコシ耕地とみなされているにもかかわらず，現実には農作物の種類が多く，農業生産がジャガイモとトウモロコシに集中していないことがアマレテ農業のひとつの特徴であると言うことが出来よう。

アマレテに隣接するチャラサニ川一帯においてはドイツの調査団による包括的な調査が行なわれ，その成果が刊行されている [GISBERT *et al.* 1984]。その中に短いものではあるがカアタにおける農耕について報告した論文がある [MANKHE 1984: 59–71]。この中でマンケはカアタの標高 3,100 m から 4,200 m にわたる土地を4つのレベルにわけている（表3）。4,200 m 以上の牧草地は農地ではないため一応除外して考えるとして（後述する)，他の3つのゾーンを見てみると，3,900 m〜4,200

表3　カアタにおける土地利用の高度区分

標　　高	利　　用
4200m 以上	リャマ・アルパカ飼育
3900m～4200m	ルキ栽培，牧草地
3500m～3900m	イモ栽培，休耕時放牧
3100m～3500m	穀類・豆類集約栽培

[MANKHE　1984: 69]

m のルキ栽培ゾーンが 3,500 m～3,900 m のイモ栽培ゾーンと区分されている。このゾーンは寒冷であるので，耐寒性はあるがアクが強いため凍結乾燥によってチューニョ (chuño) やトゥンタ (tunta) に加工するルキ (ruki) という種類のジャガイモしか栽培出来ないゾーンである[3]。アマレテではこれをジャガイモ耕地として一括しており，カアタとアマレテは近接しているため当然かもしれないが，基本的には同じゾーン区分を持っている。

ラパス県カマチョ郡のアイマラ語圏に位置するアンバナ (Ambana) は，アマレテと同様にアンデス東斜面にある集落であるが，そこにおいてフランスの調査団による総合調査が行なわれ，その成果も刊行されている [IFEA　1980]。それによるとアンバナの農地は7つのカテゴリーに分類されているが，アマレテとの比較をする上で関係してくるのは次の3カテゴリーである。1. アイノカ (aynoka) [一時的耕作区域] (Zona de los cultivos temporales)，2. 乾燥畑セカノ (secano) [無灌漑継続耕作区域] (Zona de cultivos permanentes sin riego)，3. 灌漑農地レガディオまたはサヤニャ (regadío–sayaña) [灌漑耕作区域] (Zona de cultivos con riego)。その他の4つは高原のプナ，家屋に隣接する野菜畑，標高 1,800 m から 2,800 m の間の半乾燥畑と標高 1,700 m にある湿潤耕作地である。アイノカは標高 3,500 m から 4,300 m の間，セカノは標高 2,800 m から 3,850 m の間，レガディオは標高 2,800 m から 3,500 m の間に展開する農地である [IFEA　1980: 132–136]。灌漑農地と非灌漑農地が区分されている点にアマレテとの相違点があるが，後に詳述するようにセカノとレガディオを一括して考えると，上下に農耕ゾーンが二分されているという構図は共通している。

3. 2.　カパナにおける作物ローテーション

アマレテのジャガイモ耕地は7つの単位に分割されている。これを，インフォーマ

3) 凍結乾燥イモについては，[山本　1976] を参照。

ントは「7つのカパナがある」と表現する。この7つのカパナは，農作物のローテーションの単位であり，ひとつのカパナにおいてはある作物を1年しか作らない。ある年にひとつのカパナでジャガイモを作ると翌年そこではオカを作りジャガイモは次のカパナでつくる。このようにして毎年各作物の耕作地を移動させてゆき，7年でローテーションのサイクルは1回転することになる。ひとつのカパナで栽培することのできる作物の種類はアマレテ全体で決まっており，ある年にひとつのカパナで栽培される作物の種類はひとつに限定される。作物のローテーションはアマレテの集落全体で共同規制されているのである。

インフォーマントにひとつのカパナにおいて栽培される農作物の順序を尋ねると，即座に papa（ジャガイモ）・oca（オカ）・cebada（オオムギ）・haba（ソラマメ）という答えが返って来る。これがインフォーマントによって明確に意識されたカパナにおける作物ローテーションの順序である。しかしカパナは標高 3,500 m から 4,100 m の間に広がる土地であり，その環境条件は一様ではない。例えば，標高 4,000 m を超える土地ではジャガイモしか栽培することができない。しかもジャガイモといってもアマレテにおいて知られているすべての種類を栽培出来るわけではなく，ルキしか栽培できないのである。そのためそのような高地では，4種の作物によるローテーションは不可能であり，ルキを1年栽培したのち6年休耕することになる。また，3,500 m に近い比較的気候が温暖なところでは，ソラマメのあとにもう1度オオムギを植えることも可能である。そのためこのような場所では，5年耕作して2年休耕と

写真5　オカの植え付け

いうシステムがとられることになる。

また作物の種類も上記の4種類に限られない。オオムギの代わりにコムギ (trigo) を，またソラマメの代わりにエンドウ (arveja) が植えられることも少なくない。オオムギとソラマメの名を挙げるのは，具体的にオオムギ・ソラマメを個別に指して言っているというより，総称としてのムギ・マメを意味していると解釈するのが正しいであろう。ひとつのカパナでは1種類の作物しか栽培できないと前述したが，オオムギとコムギ，エンドウとソラマメがそれ故に1つのカパナに同時に植えられる例はしばしばみられる。

この7つのカパナには固有の名称は存在しない。アマレテの谷の各地点はその地形上の特徴などによって名前がつけられており，各々のカパナはその中に含まれる地点の名称のうちのひとつによって代表される。しかし，どの地点名を用いるかについてアマレテ全体の共通認識は存在しないため，インフォーマントは自分が畑を持っている地点の名称を用いてカパナを代表させる傾向がみられる。ただ，インフォーマントが挙げるカパナの名称には，ひとつのカパナの中にある10以上の名称すべてが登場するわけではないので，インフォーマントの間でもカパナを代表させるにたる地点名とそうでないものの区別は存在するものと思われる。

多くのインフォーマントが挙げた各カパナの代表名称は，1. Puusani, 2. Phurua, 3. Muruchaka, 4. Jut'ita, 5. Koopampa, 6. Chiñaruwaya, 7. Suka, の7つであるが，Puusani の代わりに Qeyarowiti, Chiñaruwaya の代わりに Mimiloni, そして Koopampa の代わりに Juuchati という名称もしばしば用いられた。この7つのカパナのローテーションの順序は伝統的に決まっており，変更されることはない。ひとつのカパナで4年耕作する場合のローテーションにおける播種・植え付けされた年度と作物の対応表は次のとおりである（表4）。

表4　アマレテにおけるカパナ・年度別播種作物　対応表

	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
1	papa	oca	cebada	haba			
2		papa	oca	cebada	haba		
3			papa	oca	cebada	haba	
4				papa	oca	cebada	haba
5	haba				papa	oca	cebada
6	cebada	haba				papa	oca
7	oca	cebada	haba				papa

1. Phurua　2. Puusani　3. Muruchaka　4. Jut'ita
5. Chiñaruwaya　6. Koopampa　7. Suka

「カパナのローテーションの順序は決まっている」とインフォーマントは断言し，「アマレテのすべての成人はそれを知っている」というけれども，実際にその順序を尋ねると，周囲に相談したり，6つしか挙げなかったり，混乱が生じる。我々の調査年1983年にジャガイモを植えつける予定であったのがJut'itaである点および，1982年に植えつけたのがMuruchakaであった点についてはインフォーマントの言明に混乱はなかったが，もっとも混乱したのはJut'itaの次がKoopampaであるか，はたまたChiñaruwayaであるかという点である。この点に関しては，多くのインフォーマントによる情報をつき合わせた結果で言うとChiñaruwayaが正しいようであるが，両カパナは調査当時休耕しており，はっきりとしたイメージがなかったのかもしれない。

現在のアマレテにおいて，ローテーションは何らかの機構によって目に見える形で規制を受けているわけではなく，どこのカパナに播種するかは暗黙の了解事項なのである。また，いつ播種を開始するか，収穫を終えるかについてもコントロールする役職があるわけではなく，これまた暗黙の了解によって決まっている。カパナのローテーションの順序が口頭ではっきり答えられないという事実の蔭には，どのカパナの次にどのカパナといった機械的な形では日常考えず，もっと実際の農作業の手順にそった形でしかローテーションが考えられていないという事情が存するのかもしれない。

アマレテが位置する谷にあるカパナ適地はその殆どがアマレテに属し，チャカワヤ，ホタオコ，アティキなどの集落はジャガイモ耕作に適する土地の一部を保有している

写真6　サピ・サイワニの谷

にすぎない。谷底から各集落の所在地の直下までアマレテの保有地が広がり，各集落は自らの集落の周辺および上部を保有するに留まる。アマレテに近接するチャカワヤはカパナのローテーションもアマレテと共通しているが，ホタオコ，アティキは全く独立したローテーション・システムを持っている。また，隣の谷にあるワト，サピ，サイワニはアマレテとは土地保有の面では独立しており，標高 3,800 m に位置するサイワニと，標高 3,000 m のサピはひとつの谷の耕地を上部から下部まで共同で保有し，利用している。しかしこの谷は幅がアマレテの谷と比べて非常に狭い上，岩が多く耕地面積は少ない。農地として使われる部分が少なくしかも人口が少ないため，アマレテの谷においてはユーカリを除くと緑が乏しいのに比べて，サピ・サイワニの谷は低木等の緑が豊かである。集落の戸数もサイワニが約40戸，サピは10戸と少ない。標高が 4,000 m を超えるワトについては調査していないためその農地の利用については不明である。

カアタにおいては，3,900 m 以上の耕地においては，ルキのみが栽培されその収穫後は少なくとも8年間休耕する。そしてその間は家畜の放牧に用いられる。放牧される家畜にはリャマ，アルパカもあるが，最も多いのはヒツジである。3,500 m から 3,900 m の間では，アマレテと同様に7つのカパナの区分に基づくローテーションが行なわれている。作物ローテーションはジャガイモ・オカ・オオムギの順序であるが，斜面の向きや土壌の条件によってはオカとオオムギの間にパパリサ（オユコ）が植えられる。休耕期間は3～4年間ということになる。そして，この休耕の期間とある年に栽培される作物の種類は集落全体によって規制されている [MANKHE 1984: 67–68]。

アンバナにおいては，カパナに対応するのはアイノカである。セカノとレガディオにおいては休耕が行なわれないのに対して，アイノカにおいては標高や土壌などの条件によって期間は異なるものの，必ず休耕が行なわれる。IFEA によると休耕期間の決定に様々な条件があり，アイノカにおけるローテーションを6つのタイプに分類している。1. ジャガイモ・オカ・カラスムギ (avena)・15～20年休耕，2. ジャガイモ・オカ・カラスムギ・7～12年休耕，3. ジャガイモ・オカ・ソラマメ・カラスムギ・8～10年休耕，4. ジャガイモ・オカ・オオムギ・ソラマメ・カラスムギまたはジャガイモ・オカ・キヌア・ソラマメ・オオムギに6～7年休耕，5. ジャガイモ・オカ・ソラマメ・オオムギ・エンドウ・カラスムギ・6年休耕，6. ジャガイモ・オカ・ソラマメ・コムギ・エンドウ・オオムギ・カラスムギ・5年休耕，の6タイプである。日照や土地の傾斜等によって影響を受けるが基本的にはタイプ1がもっとも標高の高

表5　アンバナのアイノカにおける休耕期間

標　　高	休耕年数
4100〜4300m	15〜20年
3900〜4100m	9〜12年
3750〜3900m	7〜10年
3650〜3750m	6〜8年
3550〜3650m	5〜6年

[IFEA　1980: 143]

い農地におけるローテーション，タイプ6がもっとも標高の低い農地におけるローテーションである。アンバナにおける休耕の年数と農地の標高との対応関係を表にしたものが（表5）である。

アンバナの谷の上部の各集落においては集落全体でローテーションの期間が12年と決められており，アイノカの土地は12の区画に分けられている。ローテーションの休耕期間はその集落全体の規制によって決められるのである。それに対して，それ以外の集落においてはこのような規制はなく，休耕期間は標高・日照・土壌・傾斜などの条件によってのみ決定される [IFEA　1980: 136–145]。

ここで言われている上部の集落に属する耕地の標高やその他の条件が不明なため，アマレテやカアタにおける7区画とアンバナにおける12区画の差がもつ意味はわからないが，アンバナにおいては下部の農耕適地にはかつて広くアシエンダが展開していたことを考えると，集落全体によってコントロールされかつまたサイクルの年数がはっきりきまっているローテーション・システムがより伝統的な姿を残しているとの推定が成り立つかもしれない。

3. 3.　大カパナと小カパナ

アマレテの7つのカパナは各々だいたい一箇所にまとまっている。しかし，カパナ同士を比べてみるとその生態学的な条件は同じではなく，また面積も同じではない。このため各カパナで生産される農作物の収穫高にばらつきが出る可能性がある。この問題を解決しないことには毎年各作物の収穫量を一定にすることはできず，アマレテ全体の経済も安定しないことになる。この問題は，離れた土地をひとつのカパナとしてまとめることによって解決されているとみられる。例えば，83年にジャガイモを植え付ける予定であったカパナ Jut'ita は単独ではひとつのカパナとして土地が狭すぎるとアマレテの人々は考えている。そのため，十分な広さを確保するために対岸の Umanata, Chojraya の二箇所の土地を加えてひとつのカパナとしているのである。

この離れたカパナに統合される土地をインフォーマントたちは「カパナの yapa (おまけ)」と表現した。インフォーマントたちはカパナには皆 yapa があると述べるのであるが，どの土地がどのカパナの yapa なのか明確に答えられるインフォーマントは見つからなかった。Umanata, Chojraya についてはすべてのインフォーマントが Jut'ita の yapa であると即座に答えるのであるが，Jut'ita 以外のカパナについては，この付け加えられる土地がどこにあるのかないのか，各インフォーマントに共通したはっきりした解答は得られなかった。インフォーマントの回答の中に現われた yapa は Llulluspampa, Yanapara, Apacheta, Ijimasamana, Llokespaya の五箇所である。これらの土地はアマレテの集落から谷の左岸を下流へとむかいカパナの通常の範囲が終わった先にある。

この五箇所だけでは Jut'ita 以外のすべてのカパナの yapa としては不足である。またそのことについては知らないと答えたインフォーマントにその理由を尋ねると「自分はそこに土地を持っておらず，そこの土地を持っているのは村の中でもほんの少数であるからだ」と答えた。これは，前述したカパナのローテーションの順序があやふやなのと同様の状況である。自らの個人的な部分以外のカパナに関する一般的状況については，シンディカートのメンバーは別として一般のアマレテの人々は関心がないと考えるべきなのであろうか。筆者にはまだ納得できない部分が残る。

カパナの yapa については実証する資料が不足しており，またこのような土地は面積も狭く土地所有者が数少ないため，これらの土地がアマレテ全体のカパナ面積の均一化・収穫量の安定化にどれだけ役だっているのか，現在の時点で確言することはできない。しかし，インフォーマントの意識においてカパナに yapa (chiki と呼ばれることもある) があると考えられていることは，現在では有効に機能しているか否か疑問であるとしても過去の何らかの時点ではこのような土地の組み合わせが存在し，かつまた機能したのではないかと推測させる。

カパナの yapa とされている土地がすべて7カパナの領域から外れた地点にあるということは，別の推測を生み出す。それは，これらの土地が本来はカパナのシステムに含まれていなかった新開地であり，後になってカパナのシステムの中に取り込まれたのではないかというものである。これは単なる憶測であって実はたいした根拠はないのだが，敢てこのような推測をしてみたくなる背後にはカパナが歴史的に見て変化していることを思わせる情報があるのである。それは，かつてはカパナであったが現在ではそうではないと言われる土地の存在である。

アマレテ河の右岸には，現在は耕地として使われていない土地がある。そこにはか

つて谷の上流から引いた灌漑用水が流れていたという言い伝えがあり，アマレテの集落からみると確かに斜面を水平に走る横線が見えるのであるが，そこまで上ってみてもその存在を確認することはできなかった。その土地は急峻な斜面であり，岩だらけでもあって耕地としてあまり適しているとはいい難く，現在ではヒツジの放牧地として使われているのみである。しかし，多少崩れているとはいえ石積みも残っており，高度から言えばかつてはカパナの中に含まれていたであろうと想像できる土地である。インフォーマントはその土地がかつてカパナに含まれていたが，それがどのカパナに含まれていたかについては知らないと述べた。また Umanata の先にもカパナに含まれるべき土地は存在し，インフォーマントによってはかつてはそこはカパナであったが，現在では違うと語られている。

また，ウニャ・カパナ（小カパナ）(uña kapana) と呼ばれるカテゴリーの土地が，現在のアマレテ全体のカパナの統一を乱している。これと対比する際には，前記の7つのカパナはハトゥン・カパナ（大カパナ）(jatun kapana) と呼ばれる。このウニャ・カパナは確認したところでは二箇所ある。一箇所は谷の左岸の最下流に位置し，隣の集落インカとの境界線に近いアパチェタ (Apacheta) である。もう一箇所は Umanata の先，もうアティキに近い地点にあるコロラヤ (Kororaya) である。このふたつとも，ハトゥン・カパナと同じく土地のローテーションを行なうけれども，そのローテーションはアマレテ全体の規制からはずれ独立して行なわれている。このローテーション・システムの詳細は未だ不明であるが，二箇所ともひとつの家族の所有する土地であり，ローテーションはその家族が独自でコントロールしているのである。

このウニャ・カパナもどのような歴史的経過をたどって形成されたのかは不明であるが，現在存在するカパナのシステムがかなりの歴史的変遷をたどって来ているのではないかと推測させる存在である。

4. トウモロコシ耕地（バホス）およびその他の耕地

4.1. バ　ホ　ス

バホスは前述したようにアマレテの人々の定義ではトウモロコシ耕地である。しかしトウモロコシの連作は行なわれず，カパナと同様に作物のローテーションが行なわれる。バホスがカパナと根本的に異なる点は，「ジャガイモ・オカの代わりにトウモロコシを栽培する」「休耕しない」の2点である。バホスで栽培される作物はトウモロ

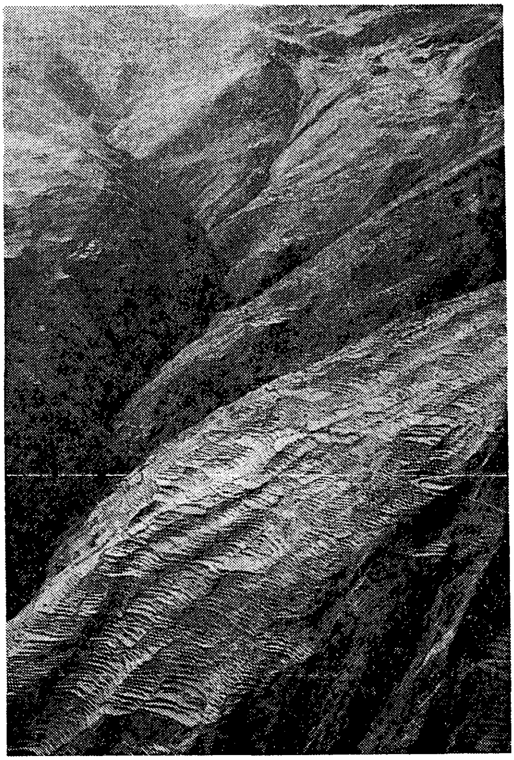


写真7　Umanata 下部

コシ，オオムギ，コムギ，ソラマメ，エンドウが主たるものであるが，アティキおよびその下方の土地では，ヤコンやラカヨテなども栽培されている。

作物のローテーションはカパナと違ってアマレテ全体でコントロールされておらず，農地の所有者の自由にまかされている。何を何処に植えるかは基本的には個人の裁量によるわけである。しかし，ローテーションの中での作物の順序は大体決まっている。なぜなら，作物によって土地を疲弊させる度合いは異なり，地力の有効利用のために望ましい作物ローテーションがアマレテ住民の共通知識となっているからである。

アマレテの住民はムギが土地の栄養分を多量に奪うことと，マメが土地に栄養分を与えることを認識している。そのため，ムギの後には必ずマメを植えるように作物ローテーションを組んでいる。また，他の作物とソラマメを混植することもしばしば行なわれている。この結果しばしば行なわれる作物ローテーションはトウモロコシ・オオムギ・ソラマメ・コムギ・エンドウといった形になるが，何年でローテーションが一巡するかなどは決まっていない。

アマレテの人々がバホスに持つ土地は一箇所に集中しておらず，谷の両側の様々な

区域に分散して耕地を所有している例が多い。そのため，収穫の際には広い地域にちらばった農地に時期を変えて収穫に出掛けることになる。その意味では労働生産性は低いと考えられるが，谷の両側では土地の条件や気候条件も微妙に異なり，また同じ側でも標高が異なれば条件は様々である。そのため，農地が一箇所に集中しているよりは分散している方が，不作に見舞われた時に大きな被害を免れる可能性が高いと考えられる。

カアタにおいては，アマレテのバホスにあたるカテゴリーはバヒオ (bajío) である。バホスもバヒオもスペイン語であり，バホスは「低い」，バヒオは「低地」を意味する。アマレテにおいてこのバホスまたはバヒオに代わるケチュア語の名称をいろいろ探してみたが，ついに見いだせなかった。これは，環境区分でプナ，ユンガという語は出て来るのに，スニ（ハルカ），キチュアという語はついに聞くことが出来ず，バイエ（valle＝谷）というスペイン語しかインフォーマントの口から発せられなかったのと同様である。

カアタにおいては，3,100 m から 3,500 m の領域がバヒオであり，作物ローテーションは，トウモロコシ・コムギ・エンドウまたはソラマメであり，その後農地の条件によってはオオムギが栽培される [Mankhe　1984: 68]。この作物ローテーションの順序はアマレテと基本的に変わらない。

アンバナにおいては，休耕しない農地は灌漑されているかどうかによって，セカノとレガディオにわけられているわけであるが，レガディオは狭い範囲にしか存在しない（レガディオについてはミリの項（4. 3）で再びふれる)。セカノの作物ローテーションはふたつに大きく分けられている。まずその第一のものは，標高 3,550 m から 3,650 m の範囲の農地におけるものである。この土地は本来ならアイノカに分類されるべき農地であるが，傾斜がゆるやかであり，かつまたアンバナの集落に近接しているため，施肥など農地の手入れを頻繁に行なうことが出来るために，休耕しない農地となっているのである。この土地におけるローテーションは，ジャガイモ・オカ・ソラマメ・オオムギ・カラスムギ・エンドウという順序になっている。

上記のものはセカノとしてはあくまで例外であり，セカノの作物ローテーションとしては第二のタイプが本来のものである。アンバナにおいては同一作物の連作も行なわれ，地味が落ちたと感じられるまで連作が続けられることがある。トウモロコシなどは12年間連続で栽培されることもあるという。しかし，これを一応除外してセカノの作物ローテーションと農地の標高の関係を表にしたものが（表6）である。

表6　アンバナのセカノにおける作物ローテーション

タイプ	標　　高	ローテーション
1	3450～3550m	cebada-arveja-haba
2	3450～3550m	maiz-haba-cebada
3	3250～3450m	maiz-arveja(2年)-trigo-cebada
4	3250～3450m	arveja-trigo-cebada
5	2900～3250m	maiz-trigo
6	2900～3250m	trigo-cebada
7	2900～3000m	trigo
8	2500～2850m	tuna

[IFEA　1980: 148] を一部改変

4.2. 放　　牧　　地

アマレテの住民はリャマ，アルパカを所有しておらず，チャカワヤの住民の中にはリャマを所有しているものもあるが，頭数は決して多くはない。収穫物等の運搬に使用されるのは主としてウマ，ラバ，ロバであるが，乾季に牧草が不足した時にウマは耐久性に乏しいため数は少なく，ラバとロバがアマレテにおいて用いられる荷駄獣の中心となっている。

これらの家畜は必要時以外には放牧に出される。放牧地はアマレテからサイワニに向かう道沿いの山腹やビスカチャニ上方の山腹である。村人は放牧地の近くまで家畜を連れて行き放置する。その後は時々様子を見に行くだけで，特に家畜の世話をすることはない。収穫期に農地から家まで収穫物を運搬する際や，遠隔地に交易に出掛ける時には持ち主は家畜を放牧地に探しに出掛け，家に連れ帰る。

ウシもウマやロバと同様にアティキ方面に放牧される。ウシは農耕用には使われることはなく，守護聖人の祭の一環として行なわれる闘牛に用いられる他は余り利用されていない。標高 3,000 m のサピでは，ウシからミルクを絞りチーズに加工しているが，アマレテにおいてはウシは放牧地に放置されているため，牛乳はほとんど利用されていない。家畜といってもロバやラバと違ってウシは労働に使用したりヒツジ，アルパカのように毛や肉を利用したりするものというより，財産として所有しておくもののようである。

荷駄獣の他にアマレテにおいて最も重要な家畜はヒツジである。ヒツジは羊毛をとるため及び耕地に施肥をするために飼育されている。荷駄獣のように放置されることはなく，施肥の期間を除いては，毎日家と放牧地を往復する。羊のために決められた特別な放牧地はなく，収穫終了後に短期間行なわれる耕作地の刈り跡放牧の期間以外

は，標高の高い非耕作地や休耕地が放牧地となっている。アマレテは一般に草地が不足気味であり，前年からの雨季に雨がすくなかった1983年には，ヒツジが牧草の不足と寒さのために数多く死亡した。ヒツジの放牧は労働効率を高めるために，数世帯共同で行なわれる。数世帯のヒツジを集めた群れを，交代でひとつの世帯が責任を持って預かり放牧するが，実際に放牧の任に当たるのは，多くの場合若い女の子である。ヒツジの放牧地はしばしば急峻な斜面であり，ヒツジはバラバラに勝手な方向に走り出すため，この放牧は重労働であり，かつまた危険な仕事でもある。ヒツジの放牧中に誤って崖から転落する事故が起きることもある。

播種前に耕地に施肥をする際には，ヒツジの群れを耕地の中に設営した携帯用の柵囲い (lluku) の中に追い込み，夜間そこで休ませて排泄させる。日中はまたリュクから出して放牧し，その間にリュクの位置を移動させ，夜にはまたその中で家畜を休ませる。このようにリュクの位置を移動させることによって，耕地全体に施肥することが可能になるのである。この間は，女の子だけにヒツジの世話を任せるわけにはゆかず，大人も耕地に泊まり込んでヒツジの番をする。この施肥の際には，自分のヒツジが属している群れだけでは頭数が足りず，他の群れのヒツジを借りることもある。そして，その借りたヒツジを紛失した際には弁償しなければならないため，ヒツジの数には常に気をくばっていなければならない。

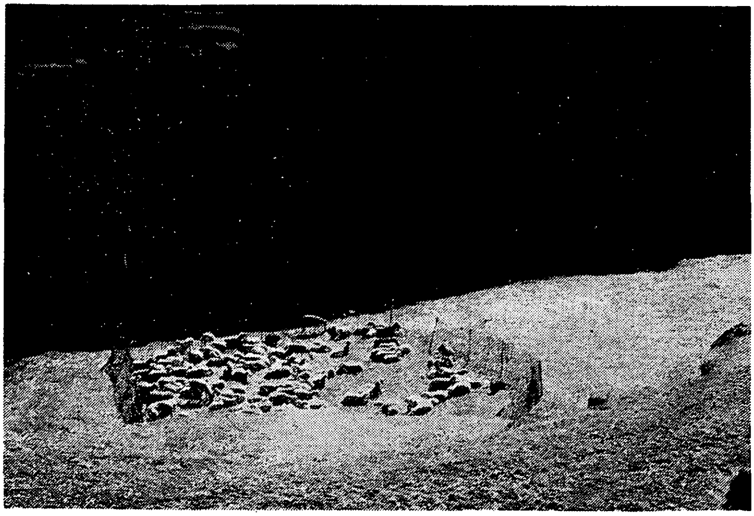


写真8　lluku

4.3. 早生ジャガイモ栽培地

通常のジャガイモの他に，ミリ (milli) と呼ばれる早生のジャガイモが栽培される。これは，普通のジャガイモより早く播種・収穫をすませるものであり，新年またはおそくとも2月までには収穫される。ペルーのマルカパタにおいては早生のジャガイモとトウモロコシが栽培されミシュカ (mishka) と呼ばれている。ミシュカは儀礼や換金用に乾季の間に播種・植え付けがなされ，収穫時期を早めたものであるが，灌漑設備のないマルカパタでは降雨量不足のために全く収穫のない時もある極めてリスクの大きいものであるという [山本　1980: 163]。

アマレテにおいては，1983年は天候異変が原因でジャガイモの収穫が不良であったために，平年より多くのミリが植え付けられた。ミリが植え付けられるのは，マルカパタと異なり灌漑設備のある農地に限られる。筆者がその植え付けを観察したのは，バホスに属する Sarachajra と呼ばれる区域と，Umanata の Atiqui 寄りにある Taalá という区域，それにもともと Chiñaruwaya のカパナに属し現在は学校の敷地となっている土地の一部の三箇所であった。Sarachajra には小さな灌漑用水がはしり，耕地に農業用水を供給することができる。また Taalá は二本の小さな谷に挟まれた区域で，谷の水が豊かであるためそこから水を引くことができるのである。学校の近くの土地を流れる灌漑用水は非常に細いものであり，それによって灌漑されている農地はほんの数枚の階段耕地にすぎない。

その他の灌漑用水としてはアマレテ側右岸の支流の上部からアティキへ引いたもの

写真9　灌　漑　水　路

があり，現在でも機能している灌漑用水路としてはこれがアマレテの谷で最も規模が大きい。それ以外の灌漑水路は水量が少なく，灌漑される農地面積は大きくない。1983年の水不足の際には，「かつてはアマレテにも左岸・右岸両方に長い灌漑水路が走っており，水に困ることはなかった」という言い伝えが古老によって口にされた。それらしい跡がないわけではないのであるが，確認することは出来ず，アマレテにかつて大規模な灌漑水路があったというのは，単なる推定の域をでない。

ミリはもともとジャガイモの品種の名前であるのだが，ミリを作るところという意味で土地の種類をあらわす言葉としても用いられる。Taalá にある農地はミリと呼ばれるのであるが，インフォーマントの言い方を借りると「この土地はかつてはカパナであったのだが今はミリにすぎない」ということになる。Taalá は標高から言えばカパナであってもおかしくない。またアマレテから見てその先にも，インフォーマントによってかつてはカパナであったが今ではそうでないと呼ばれる土地があり，前述のウニャ・カパナである Kororaya もこの近くにある。

このミリにおいても勿論ジャガイモだけを栽培するわけではなく，オカやムギ，マメをも栽培するわけである。特にミリは収穫が早いため，その後再び他の作物を植え付けることが可能である。Sarachajra のようなバホスに位置する農地においては，ミリの後にトウモロコシを植えるが，ムギ類を植えることもあるという。しかしこのローテーションは共同体の規制に従うわけではなく，土地の持ち主の自主性にまかされている。この意味では，ミリはジャガイモも栽培する土地であり，かつてはカパナ

写真10　ミリの植え付け

に属していた土地もその中に含みながら，集落のコントロールから外れ，ローテーションの面やアマレテ住民の意識の面ではバホスの性格を持っていると言える。

アンバナにおいてもレガディオにおいてミリが栽培されている。レガディオはアマレテのミリと同じく灌漑農地であるため，乾季でも播種・植え付けが可能である。3,600 m から 3,650 m の領域では同じ年にミリの後にソラマメまたはエンドウを植え，3,450 m からはミリとトウモロコシを同じ年に栽培する。しかしそれを続けると地味が減少するため，3年ごとにトウモロコシの代わりにソラマメかエンドウをまくとのことである [IFEA　1980: 151]。

5．土地所有の形態

5.1. サヤニャ

カーター (William E. Carter) とママニ (Mauricio Mamani P.) によれば，アルティプラノの土地はふたつの主要なタイプ――サヤニャとアイヌカ (aynuqa)――に分けられる。サヤニャとは古くからの家屋敷が存在した区画を指し，そこには現在でも家屋が建っている。しかし，サヤニャは家及び中庭に必要な土地に限られるわけではなく，その周囲の土地をも含む土地区画である。首都ラパスからアルティプラノを南へ走りオルロへと続く舗装道路沿いにあるアイマラ語圏のイルパ・チコ (Irpa Chico) においては，サヤニャは村の土地の中ではよく灌漑が施され肥沃な土地となっている [Carter and Mamani　1982: 7]。

アンバナにおいては前述のようにアイノカ (aynoka)，セカノ (secano)，レガディオ (regadío) の3つが区別されており，アイノカは標高 3,500～4,300 m にある土地であってアマレテのカパナに対応する。セカノは標高 2,800～3,850 m にある土地であり，休耕しないが灌漑は施されていない。最後にレガディオは標高 2,800～3,500 m にある土地であり，休耕せず灌漑を伴うものである [IFEA　1980: 132–136]。この最後のレガディオがサヤニャ (sayaña) とも呼ばれるのである。

カアタにおいては，サヤニャはカパナの中に各家族が所有するひとかたまりの土地を指す。[Mankhe　1984: 68] アマレテとカアタの農業システムはカパナの項(3.1)で前述した通り似通っており，サヤニャに対する意味付けはアマレテとカアタの間で大きな相違はない。マンケの記述においてはバヒオにある土地に対してサヤニャという名称を用いるかどうか明らかでないが，アマレテにおいてはサヤニャはカパナにもバホスにも存在し，家族が占有するひとかたまりの土地で，石垣によって周囲と区別

されている土地区画を指す。

イルパ・チコやアンバナにおけるサヤニャの定義と比較してみると，アマレテにおいてサヤニャはアイノカに対置されているわけではなく，アンバナのようにサヤニャの概念と灌漑が結びついているわけでもない。しかし，アマレテにおけるサヤニャはひとつのまとまりを持った土地であり，しかも後述するチキまたはワケとくらべてみると条件の良い土地であることは間違いない。イルパ・チコにおいてサヤニャは村落内の条件の良い土地を指し，アンバナにおいてもサヤニャは灌漑を施されたこれも条件の良い土地を指している。この意味で上記のサヤニャはすべて好条件の土地であるということに共通点を見いだすことも可能である。

ひとつのサヤニャがどれだけの面積を持っているかは明らかではない。また土地の傾斜によって一枚の階段畑がサヤニャになっている場合も，急斜面のため4～5枚の階段畑をもってひとつのサヤニャが構成されている場合もある。しかし，アマレテの人々にとってサヤニャは土地の単位であるととらえられており，たとえ面積に相違が存在してもひとつひとつのサヤニャは互いに等価なものである。このサヤニャの等価性はサヤニャの代わりにトゥプ (tupu) という名称が用いられることにも表われている。アマレテにおけるトゥプの意味は明確ではないが，これはひとつの数量単位であり，収穫・貢納を計るために用いられるものであろう。

サヤニャを所有する個人はサヤニェロ (sayañero) と呼ばれる。かつてはサヤニェロはアマレテ全体で60人であったという情報もあるが，これを確かめることは出来ない。かつては，個人がひとつのカパナの中に複数のサヤニャを持っていたと言われる。そしてそのサヤニャは隣接しておらず，互いにかなりの距離を置いて配置されていた。現在ではサヤニャをひとりで所有しているものは殆どおらず（2人だけであるとの情報もある)，ほとんどのサヤニャが複数の所有者の間で分割されている。

サヤニャが tupu と呼ばれることからも，サヤニャは土地の単位でありこれが貢納または徴税の単位であったと予想できる。そしてサヤニェロは貢納・徴税の対象者であったのであろう。この予想を裏付けるものとして，調査中にアマレテの人々が行なった陳情を取り上げてみたい。インフォーマントによれば，ボリビアにおいて農民に対して掛けられる税金は土地に対するものであった。そして，「ひとつのサヤニャに対して幾ら」という形になっていたのである。現在ではサヤニャは複数の所有者の間で分割されているにもかかわらず，税の徴収においてはその複数の人々がすべてひとつずつのサヤニャを持っているかのように扱われているため，各人に対する税は本来納めるべき額の数倍にのぼっている。そのため，アマレテにおける土地細分化の実情

を訴え税の徴収を現状に基づいたものに改正するように，スペイン語を最も良く使える男性3名がラパスに派遣されたのである。

5.2. チキまたはワケ

すべてのサヤニャにはチキ (chiki) またはワケ (waqe) と呼ばれる小さな土地が付属している。これがチキであるとインフォーマントによって示された土地は急傾斜地にある小さな一枚の階段畑で，サヤニャと比べると格段に条件の悪い土地であった。このような土地に対する名称にチキとワケという2つの名称が与えられているわけであるが，その区別は調査の最後まで遂に不明のままであった。インフォーマントたちの回答は,「チキとワケは同じものである」に終始したのである。何度も「チキまたはワケ」と繰り返す煩雑さを避けるためにこれ以後はこれを「チキ」によって代表させることとする。

サヤニャには チキが常に付属していると前述したが， これをインフォーマントは「サヤニャは tronco (幹) であり，チキは rama (枝) である」と表現したり，「チキはサヤニャの yapa (おまけ) である」と表現したりする。農地としてはあくまでサヤニャが中心をなすものであり，チキは付属物であると意識されているのである。サヤニャがある一定の面積をもつ条件の良い土地であり徴税のための単位であるとすれば，チキは土地の条件も悪く税の対象にもならない土地であって，アマレテの土地全体からいえば文字通り「おまけ」であると言える。

カパナの中にあるサヤニャとそのチキの組み合わせを調べてみると，対になったサヤニャとチキは必ず同じカパナ内にあり，しかも両者は隣り合っていたり近接したりしていない。インフォーマントに自らのサヤニャと付属するチキの所在地を地名で答えてもらい，その位置を写真で確認したり実際に歩いて検分したりした結果，ひとつのカパナ内のサヤニャとチキは多くの場合その位置する高度が異なることが明らかになった。サヤニャがカパナの上部にあればチキは下部，またはサヤニャが下部にあればチキは上部といった具合に両者は組み合わされているのである。しかし，調査した例の中には，近接はしていないものの同じ地名で呼ばれる区域の中にサヤニャとチキ双方が存在することがあり，サヤニャとチキが必ず高度を大きく違えて配置されていると断言することは出来ない。

しかし，インフォーマントにサヤニャとチキの配置について質問し，両者がしばしば異なった高度に位置することを指摘すると，サヤニャとチキのどちらか片方が不作に陥ってももう片方がそれを救うのだと述べた。そして，それはしばしば起こったこ

とだと断言した。このことから，サヤニャとチキが常に組み合わされ，しかも異なった高度に配置されることは，農作物が全滅したり大きな被害を受けたりすることを防ぐための予防措置と考えることができる。この措置によって毎年の収穫を平均化させ，食料供給を安定的なものにすることが可能になるのである。

サヤニャとチキが離れたしかも高度の異なる地点に分かれて存在することの利点を考えてみると次の四点を挙げることが出来る。第一点は，栽培高度が異なることによって温度変化の影響をかわすことが可能になることである。気温が平年より低すぎた場合には，上部では被害が生じるであろうが，下部ではそれをくいとめることが可能であろうし，逆に気温が高すぎた場合には，下部で被害が生じたとしても，上部の生産がそれをカバーすることが出来よう。第二点は，栽培高度が異なれば農作物の成育の速度が異なるため，雨の降る時期にズレが生じた場合に[4]，ある高度にある農作物に対しては害を与えたとしても，その他の高度にある農作物に対しては反対に益になる可能性もあり，降雨の変化を耕作地の高度差によって相殺出来ることである。第三点は，上で述べた通り高度によって農作物の成育速度が異なるのであるから，播種・植え付け・収穫の時期は作物が同じであっても異なることになり，異なる高度に別々に畑をもっておれば，農作業が一時期に集中するのを避けることができることである。第四点は，これは高度差に関係したことではないのだが，農地の位置が離れていればその環境条件は異なっており，これが気候異変や病虫害に対して全滅をさける手段となると考えられることである。

チキの性格については，もうひとつ気になるインフォーマントの言明がある。それは，「かつては，チキはひとつの家族の共有地であり，家族のうちである年にシンディカートのメンバーとなったり，祭の主催者となったりすることによって特別の出費を必要とする者はチキを優先的に使用することを許された」というものである。現在アマレテには，後述するシンディカートの保留地であるタクスカのような例を除くと共有地的な性格を持つ農地はない。そのため，サヤニャもチキも完全な私有地と考えられており，チキが家族の共有地であったというインフォーマントの情報に対しては，否定するインフォーマントが多い。そのため，チキの共有地としての性格を確言することはこれまた不可能である。しかし，これには十分な可能性があると考える。その論拠は土地の貸借に関して見られるチキとワキというシステムに関わるものであるため，この点については当該項（6.3）において論ずることとする。

4) 1982-1983年の不作の原因がこの降雨時期のズレであった。ジャガイモの植え付け前には雨が降ったものの，その後の雨が欲しい時期には降らず，その後不用な時期に雨が降ったことによって地中のジャガイモの腐敗を招いた。

5.3. 土 地 所 有

アマレテにおいては個人の持つサヤニャは通常分散しており，複数のサヤニャを連続して隣り合わせに持つ者はない。しかし，その原則に反して広い土地を一箇所にまとめて持つ者をアンパーロ (amparo) と呼ぶ。現在では土地が細分化されたためひとりで広い土地を占有する者はなく，アンパーロはもはや存在しないと言われるが，かつてはカナサ (Canaza), スアレテ (Suarete), ユフラ (Yujra), ベガ (Vega) の四家がアンパーロであったと言われている。カナサ，スアレテ両家はアマレテから姿を消し，残っているのはユフラ，ベガの二家だけである。この二家が前述したウニャ・カパナを所有し，ベガはアパチェタで，またユフラはコロラヤで，シンディカートのコントロールするハトゥン・カパナのローテーション・システムとは独立した，ウニャ・カパナのローテーションをコントロールして来たわけである。しかし，現在この2つのウニャ・カパナがひとりの人物によって所有されているわけではない。ユフラ，ベガ両家の内部でも土地は相続によって細分化され，所有者は複数である。しかし，ウニャ・カパナは依然として一体性を保っており，独自のローテーション・システムが維持されているわけである。

現在ではかつて存在した大土地所有者アンパーロは消え去ってしまったわけであるが，現在のアマレテの全住民が均等に土地を所有しているわけではない。土地所有は，微妙な問題であり，アマレテの広い農業区域全域にわたって個別の農地とその所有者をリストアップする作業は，不可能であった。インフォーマントからのアマレテにおける土地所有一般について聞き取った情報を総合すると，土地を持つ者と持たない者がかなり明確に分かれている。また数人のインフォーマントには自分の持つ土地を残らず挙げてもらい，出来るだけ実地に検分することとした。まずあるインフォーマントから聞き取った土地の所在地のリストを参考のために掲げる（表7）。

この中で注目されるのは，comprado（買取）と分類されたものがかなり多いことである。この comprado と分類された土地はこのインフォーマントが相続によって受け継いだものではなく，自らの財力によって買い取ったものである。インフォーマントたちは，「サヤニャは売り買いすべきものではなく売買は禁止されている」と口を揃えて述べるが，上のリストにある comprado のすべてがチキであるわけではなく，実際にはかつてサヤニャの一部であった土地が多い。

対照的に，殆ど土地を持たないものもある。アマレテの人々全員がすべてのカパナに土地を持っているわけではなく，人によってはカパナのうちのいくつかには自分の農地を持たない場合があるのである。その際には，後述するチキやワキのシステムを

表7　アマレテにおける土地所有例

カパナ名	土地名	件数	区分
Chiñaruwaya	Chiñaruwaya	1	tupu
	Mimiloni	1	chiki
Koopampa	Koopampa	1	tupu
	Jiisan	1	tupu
	Intiskichan	1	chiki
Jut'ita	Jut'ita	1	comprado
	Asnoispana	2	tupu
	Chiñaskore	1	chiki
Suka	Wairapata	1	chiki
	Korawaiq'o	1	comprado
	Kanata	1	comprado
	Suka	1	tupu
Puusani	Chakawayapampa	1	chiki
		1	comprado
	Wainakowirita	1	tupu
		2	chiki
	Inkakancha	1	comprado
Muruchaka	Muruchakapampa	1	tupu
		2	comprado
	Ayaayayoj	1	chiki
	Kokaswaiq'o	1	comprado
Phurua	Inpallasimi	1	chiki
	Tistiskuchu	2	comprado
	Toqospata	1	chiki
	Chilsi	1	tupu
Jut'ita	Chojraya	1	comprado
	Umanata	1	chiki
Yanapara	Yanapara	1	comprado
Llokespaya	Llokespaya	1	comprado
Milli	Umanata	1	
	Millalla	1	
	Sarachajra	1	
Bajos	Sokawa	1	
	Umachi	1	
	Millimilli	1	
	Sarachajra	1	
	Juchuisakokata	1	

通して農地を借りたり，本来してはならないことであるのだが，オカを栽培する順番であるカパナにジャガイモを植えるなど，作物ローテーションの順序からは許されていない作物を栽培したりする。ただ，あるカパナが休耕地であるか否かは厳密に守られており，休耕地の一部で耕作が行なわれている例は見いだすことが出来なかった。

アマレテの農地そのうちでも特にカパナが，例えばペルーのカライバンバ (Caraybamba) のライメ (laime) のように [Fujii and Tomoeda 1981]，かつてはアマレテ全体の共有地であったと想定することは可能であろう。オブリタスによれば，各集落のメンバーは割り当てられた土地を各カパナに持っており，すべての人々が土地に対する平等の権利を持っていた。そして土地の私有が始まったのは，ボリビアが独立した後の1880年に公布されたレビシータの法令であったとしている [Oblitas Poblete 1978 (1963): 313–314]。

アマレテにおける農地が共有であったことの名残は「サヤニャは売買してはならないものである」や後述する「チキやワケはシンディカートが共同管理して土地を持たない人々に割り当てるのだ」などというインフォーマントの言明にもうかがうことが出来るが，もうひとつシンディカートのメンバーのためにカパナの中に土地が用意されていたことも，農地特にカパナが共有地であった時代の残存物と考えられる。この土地はタクスカ (takusqa) と呼ばれ，各々のカパナにあった。

シンディカートのメンバーは毎年新年をもって交代する。ある年にシンディカートのメンバーであった人々は翌年ジャガイモを植え付けるカパナ内にあるタクスカを占有する権利がある。調査年1983年にシンディカートのメンバーであった人々は翌年ジャガイモを植え付ける Chiñaruwaya のタクスカに権利を持つわけである。しかし，Chiñaruwaya のカパナのタクスカはその場所に学校が建てられたため廃止され，Koopampa にかわりのタクスカが設定された。そのため1983年のシンディカートのメンバーは Koopampa に存在する二箇所のタクスカの内の一方を占有することになっており，Koopampa が休耕にはいるまで作物ローテーションに従ってタクスカを利用するのである。

タクスカはシンディカートのメンバーのための土地であると述べたが，その恩恵にあずかれるのはすべてのメンバーではなく，ヘネラル (General) とよばれる序列最上位のものから8番目の者までである。この8人は，シンディカートに改変されるまえの組織における最上位者セグンド (segundo)，次席アルカルデ・マヨール (alcalde mayor)，および6人のヒラカタ (jilacata) に対応するものである。かつては，ジャガイモの植え付け儀礼コワなどで中心となる呪者プリチェフ (purichej) に対するタ

クスカも存在したが，プリチェフは儀礼遂行にあたって経済的に何も負担しないという理由で，集落に水道を引く費用捻出のためにプリチェフのタクスカは売却されてしまったとのことである。

このような土地の共有制が崩れ，土地所有に不均衡が生じた結果，1年の大部分の期間アマレテを離れ，ユンガ地帯で砂金の採取に従事している人々もある。あるインフォーマントは，「自分たちは夫婦とも早く親に死に別れたため，本来相続すべきであった土地を他の近親者に不当に強奪され，そのため農地の不足を補うため砂金採りにでかけている」と述べた。チャカワヤはアマレテと一体に扱われているものの，土地特にトウモロコシ耕地が不足している人々が多く，その中には土器を製造してアマレテ内や他地域で販売したり農作物と交換したりすることによって，農産物の不足を補っている人もある。

このような兼業や出稼ぎがすべて農地の不足に起因していると考えるのはあまりに単純すぎるのは確かである。ラパスなどの都市に出稼ぎに行く例では，都市の持つ独特な吸引力を考慮にいれなければならないし，たとえ農地が十分であっても現金収入をもたらす出稼ぎは魅力のあるものであろう。しかし，農地不足が原因で兼業や出稼ぎに活路を見いださなければならない人々があることも事実であり，ここにアマレテにおける土地所有の不均衡が現われている。ただ，この不均衡がどれほど大きいものであるのか，またこれが将来にわたるアマレテからの継続的な人の流出に結びつくのか，という問題にまで分析を現在進めることは出来ない。ここでは単に現在のアマレテの人々が決して全員同じレベルの経済状態にはないことを指摘するに留めておく。

この問題には，ベシーノ (vecino) が持つ土地の問題が関係している。ベシーノはもともとのアマレテの住人ではなくペルーなどから移住して来た人々であるが，買収等によりアマレテの広い土地を所有し，アマレテでこれまで大きな力をふるって来た。そして，現在でも隠然たる勢力を保持しているのである。アマレテにおけるその影響力から考えると，農地改革から30年以上たった現在でもかなりの土地を私有していると想像され，事実それを指摘するインフォーマントもあったが，その実態を今回の調査で明らかにすることは不可能であった。

5.4.　土地の相続

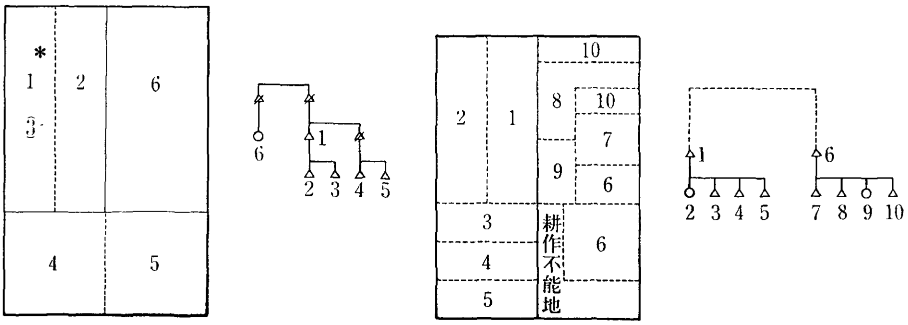
アマレテにはアシエンダが存在したことがない。そのため，ボリビアにおいて1952年に始まった農地改革 (Reforma Agraria) の結果として，他の地域例えばアンバナに於いて起こったような土地所有の変更にまつわる重大な問題 [IFEA 1980: 35–

63] がアマレテには生じなかったと考えられる。しかし，農地改革がアマレテに影響を及ぼさなかったわけではない。ベシーノの土地が減少したと述べるインフォーマントもあり，土地の分配に何らかの変化が生じたことは十分予想できる。また，それまではベシーノの世襲・終身職であったといわれる autoridad política の役職をベシーノではないアマレテ住民が務めるようになったことや，シンディカートが形成されたこともアマレテにおける大きな変化であったと言えるであろう。

しかし，我々の現在のテーマに即しては，農地改革が土地相続に及ぼした影響に最も注目しなければならない。これもはっきりした資料がないので，インフォーマントからの聞き取りに頼らざるを得ないのであるが，農地改革以前においては土地の相続権があるのは男性だけであり，女性は土地に対する権利がなかった。農地改革以後は，原則として土地の相続は男女同権の均分相続であるため，現在では女性も土地の所有権を保持することとなったのである。

土地の相続のプロセスを見てみると，子供たちが成人するに従って親は自分の私有地を分けて行き，最後に残った土地は親の死後子供たちによって分配・相続されるのである。土地相続は原則は均分相続であっても，現実にはその通り厳密に行なわれているわけではない。現在でも，相続によって配分される土地は男子に対しての方が女子に対してよりも多い傾向がみられる。あるインフォーマントの意見によれば，男子には世帯を営んで行く責任があり，女子よりも土地の配分が多いのは当然であるとのことである。その他，親の老後の面倒をみる子供（多くは末子であると言われる）により多く土地を配分するとか，万聖節 (Todos Santos) の際に亡き親を祭る責任を負った子供に多く配分するとか，実情に応じた相続の弾力的な運用が行なわれている。

かつて，まだ分割されないままのサヤニャをひとりの持主が複数所有していた際に



*注
3は独身，1の死後土地を相続する予定

図1　サヤニャの分割例

は，サヤニャを丸ごと息子たちに与えたと言われる。しかし，丸のままのサヤニャをひとりで所有することが出来なくなった現在，土地を分割して相続せざるを得ない。たとえば，ある男にふたりの子供がいたとして，あるカパナに二箇所土地を持っていたとする。その土地はいずれもひとつのサヤニャをその兄ふたりと三分したものであるとする。つまり，この男はサヤニャの三分の一の土地を二箇所所有していることになる。この土地をふたりの子供に分け与える際にはどのようにするのであろうか。第一の可能性はこの二箇所の土地をそれぞれ一箇所ずつひとりの子供にまとめてあたえるやりかたであり，第二の可能性は二箇所の土地をそれぞれ二分して，サヤニャの六分の一の土地を二箇所ずつふたりの子供に与えるやりかたである。

アマレテにおいては前者の方法は採用されない。土地は必ず分割されて子供たちに伝えられる。そのため，土地の相続が行なわれる度に土地は細分化されて行く。農地は一箇所に固まっていた方が農作業の効率は高いと考えられるにもかかわらず，土地を細分化して，数多くの地点に土地を持とうとするのは，カパナやサヤニャの項で触れた農産物の全滅を防ぐというアマレテ農業の基本の反映であろう。前にも述べたように，農地は様々な条件のところに分散してある方が，気候変化や病虫害にうまく対応することが出来る。そのため，農地を敢えて一箇所にまとめずに分散する方向を選んでいるのだと考えることが出来よう。

しかし，このために一箇所の農地はますます小さくなり，アマレテ住民の決まり文句となっている「土地が足りない」という嘆きを生じることになる。調査当初からインフォーマントがしばしば口にしたこの嘆きを，最初は土地の絶対量が少ないことに対する嘆きであろうと思った。確かに，昔と比べればアマレテ住民ひとり当たりの農地面積は減少しているであろう。しかし，そのように嘆いたインフォーマントの持つ土地を調べてみると，農地は決して不足しておらず，自ら耕作せずに他人に貸していたり，耕作可能であるにもかかわらず休耕している土地を持っていることがわかった。そのことから考えて，現実に農地が不足している人々は存在するにしても，アマレテの人々が嘆く土地の細分化 (minifundización) とは，「土地の絶対量の不足」というより「一箇所にまとまった農地の細分化」と考えたほうが，より正確である。

6. 土地の貸借・共同労働

6.1. ワ　　　キ

所有する耕作地が不足している際に行なわれる，共同経営のひとつの形態がワキで

ある。オブリタスによれば，これはカヤワヤにおいては一般的なやりかたであり，次のような形をとる。共同経営 (aparcería) の契約においては，土地の持主 (propietario) は土地を提供し，共同経営者 (aparcero) は種と労働を提供する。そして収穫物は折半する。しかし，土地を持主が提供し種を共同経営者が提供することに変わりはないが，労働は両者の責任となっている場合もある [OBLITAS POBLETE　1978 (1963): 310]。これは，アマレテにおいても全く変わりなく行なわれており，あるカパナに土地を持たないものが，持主から土地を借りるためのひとつの方策である。

オブリタスによれば，ワキが行なわれるのは農業だけに限らない。例えば，大工が道具と労働を共同経営者が木材と労働を提供する例，土器作りにおいてひとりが粘土と竈を，共同経営者が労働を提供する例が紹介されている。また植物が繁茂しているところでは土地の持主が農地を切り開き，共同経営者が種と労働を提供する例もあるとのことである [OBLITAS POBLETE　1978 (1963): 310–311]。

ここでは，オブリタスの原文にある aparcería を共同経営，aparcero を共同経営者と訳した。aparcería には小作という意味もある。確かに，地主の土地で耕作する小作人が収穫物の半分を地主に取られるという様にみれば，ワキは地主一小作関係ととることも出来よう。オブリタスは，propietario と aparcero の間の身分関係については何も述べていないのであるが，アマレテにおいては地主一小作関係という用語から連想される小作の地主に対する隷属といった上下関係は存在しない。そのため，aparcero に小作人という訳語をあてるのを避け，これもあまり適当な用語ではないがより誤解の少ない共同経営者という語をあてることにしたのである。

このワキはイルパ・チコにおいても，ひとりが種をもうひとりが土地を提供し，労働力は両者が提供した上で収穫物を折半する共同行動として記述されている [CARTER and MAMANI　1982: 136]。このワキはアマレテの住民間で行なわれるだけではなく，アマレテの住民と他の集落の住民との間でも行なわれる。例えば，アマレテから川の左岸を下流に向かい，アパチェタを過ぎるとサカナコンやインカといった集落の領域にはいるが，これらの集落に属する土地をアマレテの住民がこのシステムに基づいて利用する例があるのである。この場合にも，アマレテ内での場合と同じくワキの契約は永続的なものではなく，地主との間に上下関係が存在するわけでもない。

6.2.　チ　　　キ

ワキが共同経営の名をもって呼ぶことのできるものであるとするならば，チキまたはチキニャは地主がその土地で働いた労働者に対して与える報酬または贈与と呼ぶこ

とが出来る。オブリタスによれば，チキの契約においては地主はある人物に農地の一部の使用を認め，その人物チキニェロ (chiquiñero) はその土地における収穫物を自らのものとする。その使用を許可された土地においてチキニェロは自らの種を使い播種から収穫までのすべての労働に従事する場合もあれば，単に収穫のみに参加して収穫物を受け取る場合もある [Oblitas Poblete　1978 (1936): 311]。

これもアマレテにおいてしばしばとられている方法である。この土地の使用許可は単なる好意によるものではなく，地主の他の土地において行なった労働に対する見返りとして行なわれるものである。土地を持たない人物が，他の人物の土地で働くことによって，一定の広さの土地の耕作権を手に入れる方法がチキであると言えよう。オブリタスはチキとはパトロンがその奉公人に対してその仕事への報酬として与えるもので，奉公人が自分の責任で農作物を入手するようにしたものであるとしている [Oblitas Poblete　1978 (1936): 311]。

このパトロン―奉公人関係はオブリタスの出身地チャラサニのようにアシエンダが広く存在したところでは，アシエンダの領主アセンダード (hacendado) とアシエンダの奉公人の間に存在した関係を想定してもよいものであろう。アシエンダが存在しなかったアマレテにおいては，特に農地改革以後には，このパトロン―奉公人関係がいかなるものであったかについてはチャラサニなどと比べて分かりにくい。土地を多く持っていたベシーノとその土地を耕していたアマレテ住民の間でもこのような関係が存在していたことは十分考えられ，現在でもそれが続いている可能性もあるが確認することはできない。チャラサニにおいてはかつてアセンダードであった人々が，農地改革の結果自分の土地を耕してくれる奉公人を失い，その結果としてチキまたはワキを通じて労働力を調達しているという情報もある。

オブリタスによれば，家畜の持主とそれを依託された牧者の間にもチキの契約は存在するという。家畜の第一子は通常虚弱で死にやすいとされているため，それを注意して育てあげた場合には牧者の所有に帰す。このようにして行なわれる贈与もまたチキと称されるのである [Oblitas Poblete　1978 (1936): 311–312]。

6. 3.　土地の種類としてのチキ・ワケと貸借としてのチキ・ワキ

5. 2において，チキ・ワケがかつてはある家族集団の共有地であったとの情報があると述べ，それが事実である可能性の根拠として土地の貸借関係に於いてチキ及びワキという概念があることを示唆しておいた。この点に再び帰って検討してみたい。まず語句の問題から検討してみると，チキまたはチキニャという語は双方に共通して使わ

れるが，ワケ・ワキに関しては土地に対してはワケ，貸借に対してはワキと用語が少し異なる。耕作権の贈与としてのワキについてはオブリタスの他，カーターとママニによっても報告されているが [Carter and Mamani　1982: 136]，土地のカテゴリーとしてのワケについてはアマレテでの聞き取りの他に資料がなく，この両者に果たして関係があるのか，はたまた無関係なのか決定することができない。周囲の他の集落における資料の集積を必要とするところである。そのため，ここではあくまでワキとワケがたがいに関係があるとの仮定の上で議論を進めることをお許し頂きたい。

ここで，土地のカテゴリーとしてのチキ・ワケと貸借・贈与のカテゴリーとしてのチキ・ワキが互いに関係ありとする根拠としてインフォーマントによる別の情報を紹介することにする。それは，チキ・ワケはサヤニャと異なって個人の所有ではなく集落の共有地であり，その管理はシンディカートが行なっているというものである。そして，チキ・ワケは土地を持たない人々にシンディカートが分配して耕作させるというのである。この情報を寄せたインフォーマントはシンディカートのメンバーではなく，また所有地が少ないため一年の大部分をアマレテの外で暮らしている。そのためこの情報の確度は定かではない。そして，この情報もチキ・ワケが家族集団の共有地であったという情報と同じく他のインフォーマントたちによって否定された。

この共有地としてのチキ・ワケという情報がアマレテにおいて現在の時点で確認されないとしても，その正確な姿はもはや復元不可能かもしれないが，かつてはそのような意味を持っていた可能性を否定することは出来ない。その根拠となるのが貸借・贈与のカテゴリーとしてのチキ・ワキの存在である。このチキ・ワキの意味するところは，土地の不足を労働または種の提供によって補うことが出来るという点にある。この特徴は，チキ・ワケにおいても共通する。家族集団の共有地である場合には，その特別な出費を補うために労働を余分に提供したものがその報酬を得ることを認めるというものであり，集落の共有地である場合には，土地を持たない者が労働力を提供した報酬にある条件の悪く狭い土地の耕作権を認めるというものである。

この意味ではこれらの土地における耕作権の容認はチキというよりワキとしての性格を持つと言えるが，ワキであるにしてもチキであるにしても，必要とする農産物の不足を補償するメカニズムであるという点では共通している。この点から考えるとチキ・ワケが共有地であったという情報から演繹される補償のメカニズムと土地の貸借・贈与としてのチキ・ワキにおいてみられる補償のメカニズムは同じ性格のものであると言える。そしてその両者が余りに似通った名称で呼ばれていることから，かつては土地のカテゴリーとしてのチキ・ワケは共有地としての性格を持ち，そこに前述し

たような補償のメカニズムが存在したと推測されるのである。

6.4.　牧民に対する土地の貸与

農地の不足しているプナの牧民に対してアマレテの土地が貸与されることがある。これは，前述のチキやワキとは異なった手続きに基づいて行なわれる。ワキにおいては収穫物が折半され，チキにおいては地主は使用を許可したチキの土地の収穫物には権利がないわけであるが，プナの牧民に対する土地の貸与においては，牧民はアマレテの住民に対して支払いをしなければならないのである。

この支払いは，牧民が飼育するアルパカまたはリャマをアマレテの地主にたいして引き渡すことによって行なわれる。土地を借用したい牧民はまず自分の家畜を地主に引き渡し，それによってカパナ内のジャガイモ耕地の耕作権を得ることが出来る。その土地は，カパナの作物ローテーションに従って用いられ，耕作権は休耕にはいるまで有効である。つまり，カパナにおける連続耕作年数だけある耕地の耕作権を牧民は一頭のアルパカを支払うことによって確保するのである。インフォーマントによれば，この耕作権は休耕にはいると同時に消滅し，その次にそのカパナが耕作期にはいる時にその土地が再び同じ牧民に貸与されるか否かは，その都度決められるとのことである。一度耕作権を得たとしてもそれは既得権として，永続することはない。

牧民に貸与される土地はジャガイモ耕地に限られ，トウモロコシ耕地が貸与されることはない。アマレテにおいてはトウモロコシ耕地（バホスの土地）は不足していると考えられているのである。チャカワヤやホタオコの住民はトウモロコシ耕地をあまり所有していない。しかし，アマレテにもトウモロコシ耕地が不足しているため，トウモロコシを入手するためには別の手段を講じることが必要となる。その手段が前述した土器の製作である。

ホタオコとチャカワヤの住民は，土器をアヤタ (Ayata) の谷などトウモロコシを大量に生産するところへ持って出掛けて行き，土器とトウモロコシを交換するのである。アマレテの谷はトウモロコシの生産量が多くないと牧民たちに考えられているようであり，プナで出会ったウリャウリャやウチャウチャの牧民たちも，トウモロコシの入手先はアヤタの谷やモコモコ，チュマ (Chuma) の谷であると述べていた。そのため，ホタオコやチャカワヤの住民も近くのアマレテでなく遠いアヤタまでトウモロコシを求めて出掛けるのである。

6.5. 共　同　労　働

土地の貸与ではないが，収穫等の労働において様々な共同行為が存在する。その第一のものは，アイニ (ayni) と呼ばれるものである。これは互酬的な共同行為であり，あるとき他の人の協力を受けたならば，いずれ相手に協力してお返しをしなければならないものである。イルパ・チコにおいてはアイニは助力の交換であり，一日の労働に対して一日の労働を返すものである。どのような仕事にたいしてもアイニは行なわれるが，大部分は播種と収穫に関する仕事である [Carter and Mamani 1982: 132]。アマレテにおいては，農業労働の他に家の建設（土壁作り，屋根ふき，など）においてもアイニが行なわれる。これに参加するのは，親族・姻族・コンパドレ・アイハードなどを除けば，同じバリオの人々である。

オブリタスはカヤワヤの共同行為として三種類を区別している。それはアイネ (ai-ne)・ヤナパ (yanapa)・アブハタ (abjata) の3つである。アイネは上記のアイニと同じものであり，これはオブリタスの言い方を借りればサービスの貸与であって，いずれ返さなければならないものである。ヤナパは義務的な無料奉仕であり，老人や孤児の農地を耕したり，コレヒドールや教会の農地で働いたりすることである。これには支払いはなされないし，後に奉仕を返す必要のないものである。アブハタはある人物が結婚式や誕生日を祝ったり，祭の主催者になったりしたときに，アルコール，家畜（ヒツジ，モルモットなど）を届けることである。この義務があるのは，その人物の婿，アイハードその他の親類縁者であり，これはもちろん無料奉仕である [Oblitas

写真11　共　同　労　働

Poblete 1978 (1936): 306–310]。アマレテにおいて，ヤナパを確認することは出来なかったが，アマレテの守護聖人の祭において祭全体の主催者や各舞踏集団の後援者のもとに，姻族やアイハードなどから数多くの届け物がなされたことが確認された。

もうひとつのミンカ (mink'a) と呼ばれるタイプがある。これは，農作業に参加することによって例えば収穫の一部を受け取るなどの形で，労働に対する報酬を得るものである。その意味では共同労働とは言い難い。イルパ・チコにおいては，返さなければならない借りをアイニによって貯め過ぎないように，ミンカによって手伝いを集める例が紹介されている。一日の労働に対する支払いはジャガイモの場合は25リブラ（約 11 kg），キヌアの場合は12 1/2〜18リブラ（約 5.5 kg〜8 kg）である [Carter and Mamani 1982: 132–133]。アマレテにおいても同様にミンカが行なわれているとインフォーマントは述べているが，筆者はその実際の場面を目撃しておらず，その詳細を報告することはできない。

7. おわりに

これまでの報告のまとめとしてまずアマレテの土地利用の特徴を５点にまとめてみることにしたい。

[1] 他の多くのアンデス社会と同じように，耕地が標高に従って上部と下部に二分されていること。アマレテ住民の理念に従えば，上部はジャガイモ栽培可能な土地であり，下部はトウモロコシ栽培可能な土地である。しかし，実際には上記の二作物に限らず，オカ・イサニョといった根茎類，オオムギ・コムギといったムギ類，エンドウ・ソラマメといったマメ類も多く栽培されており，ジャガイモやトウモロコシの農作物全体にしめる割合はペルーなどで報告されている例より低い。

[2] 作物のローテーションが行なわれ，同一作物の連作は行なわれていないこと。上部のジャガイモ耕地においてはジャガイモ・オカ・ムギ・マメのローテーションが７年周期で行なわれており，ひとつのローテーション単位で栽培する作物の種類・播種収穫の時期はアマレテ共同体全体によって規制されている。下部のトウモロコシ耕地においてはトウモロコシ・ムギ・マメのローテーションが行なわれる。播種，収穫の時期はおおよそ一致しているものの，作物の種類の決定は各耕作者の自由に任され，共同体による規制は行なわれていない。

[3] 耕地は大きな土地と小さな土地がセットになって組み合わされており，耕地を一箇所にまとめないことによって，気候不順等が農作物に与える被害を小さくくいとめようとしていること。ジャガイモ耕地においては，ローテーションの単位（カパナ）が，広い土地とそれから離れた狭い土地の組み合わせから出来上がっている。また個々の耕地の単位（サヤニャ）には，チキまたはワケと呼ばれる小さな土地が付属している。カパナ内にあるサヤニャの場合，ワケまたはチキはサヤニャと離れた地点にあり，しかもその標高が異なるように配置されている。

[4] 歴史的にみて時間の経過につれて，伝統的な土地利用の形態が変化しているのではないかと考えられること。カパナのローテーションのシステムにおいても，かつてはカパナに属していたと考えられる土地が現在は利用されていなかったり，共同体によるローテーションのコントロールからはずれている場合がある。また土地の一部への集中や，農地改革の影響による土地相続形態の変化が，アマレテに住む全員に土地に対する平等な権利が認められにくくなっている現状を導いている。

[5] 耕地を殆どもたない属村の住民との間や，隣のチャラサニ側の村落で逆に耕地が余っている村の住民との間で土地の貸借関係があること。ホタオコ，リャチュアニなどの属村はジャガイモ耕地が不足し，そのためアマレテで多くのジャガイモ耕地を持つものから土地を借り，その支払いのためにリャマやアルパカを引き渡す。アマレテにおいてはトウモロコシ耕地は不足していると考えられており，トウモロコシ耕地の貸借はおこなわれない。また，アマレテ内部でも土地を持つ者と持たない者があり，土地を持たない者と持てる者の間の土地の貸借や，土地を持たない者の砂金採りや首都への出稼ぎが存在する。

このうち [3] の大小の土地の組み合わせについてまずもう少し考えてみたい。アンデス地域における農耕においては，栽培作物それぞれに数多くの品種が存在し，しかもそれら複数の品種がひとつの畑に混植されている例がしばしば見られる。これは，気候不順や病虫害に対して作物の全滅を防ぐための方策であると考えることができるが，それと同じ考え方が大小の土地の組み合わせにも見られるのではないだろうか。この土地の組み合わせ方は面積の大小だけではなく，条件の良し悪しによっても決められている。大きな土地の yapa である小さな土地は急斜面であるとか，標高が高いとか，条件の悪い土地である。このような土地を組み合わせることによって，アマレテの農業は作物の全滅や年度による収穫量を一定に保とうとしていると考えられる。

このような耕地の分散化と，土地をサヤニャという単位に分割し，しかもひとりの個人が所有するサヤニャを一箇所にまとめずに互いに距離をおいて配置していることは，考え方の基本が共通している。サヤニャが細分化され，個人が一箇所に所有する農地がどんどん小さくなっているというのに，耕地を集中して所有するという方策がとられる兆はない。そこには，耕地を一箇所に集中して労働生産性を高めようという意識は全く存在せず，たとえ労働効率は悪くとも耕地はあくまで広い範囲に分散させておこうとするのである。

主たる土地に付属している土地が全体にしめる割合はそれほど大きいものではないと考えられる。そのような小さな土地を組み合わせたところでたいした補償効果は生じないかもしれない。この点については現在数量的に計ることが出来ないのであるが，付属地は条件が悪い土地であることを考慮に入れると，これはあくまで yapa である。補償・調整といってもせいぜい微調整にすぎず，これまでの報告で述べて来た土地の組み合わせによる不作の救済をあまりに重要視するのはあるいは危険かもしれない。しかし，たとえ量的にはたいしたものではなくても，それはひとつの安全弁として働くものであることは認めてもよいと思う。不作の時を考えて用意する調整地は小さなものであるのが当然であり，あまり大きくては逆に平年の収穫量を減らしてしまうであろう。

このような小さな単位に分割し，それには必ず yapa をつけて補償・微調整を行なうやり方は，アマレテの人々が行なう物々交換の手続きの中にも見て取れる。我々が目撃した物々交換においては，パン・砂糖・コカの葉などとジャガイモ・オカ・トウモロコシなどが交換されていた。そのやり方は砂糖片手に軽くひとつかみに対してジャガイモ両手に一杯といった具合に交換のための単位を定め，行なうものである。その際に，交換は必ず1単位ごとに行なわれ，数単位まとめて行なわれることはない。パンとジャガイモの交換を例にとってみれば，パンが2単位欲しい場合には，パン1単位とジャガイモ1単位の交換をまず行ない，それが終わったところで改めてもう1単位の交換を行なうのである。決して，2単位ずつまとめて一度に交換することはない。このために交換には非常に時間がかかることになる。

また物々交換においては，場合によってアマレテ側が出す場合と相手側が出す場合とがあるが，交換を終了させるためにどちらかが yapa を出さなくてはならない。この yapa の量が全体に占める割合はそれほど大きくはないが，ここで微調整を行なわない限り物々交換は成り立たないのである。

またこの物々交換は少なくともアマレテ側にとってはいかにも小規模である。物々

写真12　物々交換

交換によって一回に手に入れるものはコカの葉数つかみとか，パン2個に砂糖少々といった具合であり，そしてこれを毎週のように繰り返すのである。ここにおいても一回にまとめて大量に交換しようという意識は存在しないのである。アマレテにおいては，ペルーにおいて報告されているような収穫期にプナの牧民が大挙して谷間に下り大量の農産物を入手して帰るといった事態を目撃することは出来なかった。交換はあくまで少量ずつ何回にも分けて行なうものなのである。

交換を1単位ずつにわけて行なうことは，外部からやって来た行商人に比べて算術に優れているとは思えないアマレテ側の女性たちがだまされない方法であるとみることも出来る。しかし，筆者はここに現在のアマレテの環境利用において共通する意識の発露を見たい。アマレテにおいては作物の種類はひとつに集中させず，土地は小さな単位に分割した上で個人ひとりひとりの土地は一箇所に集中させない。そして，主たる土地には必ず yapa をつける。このやり方とアマレテにおける交換のやり方は共通のパターンを持っているのではないかと考えるのである。

しかし，この結論は現在の時点ではあくまで仮説的なものに留まる。調査期間が少

なく，個々の畑に当たってみた資料が少ないことも結論を仮説の段階に留めた理由のひとつであるが，確言をためらわせるもうひとつの理由は，農地改革以来の変化によって土地所有の形態が変わったことによって，アマレテ農業を安定状態に置くために機能していたとおもわれるシステムの形態を現在の時点で正確に復元できないことである。

たとえば一か所にまとめて土地を所有するアンパーロが存在したことは上記の結論と矛盾する。現在ではアンパーロは解体されていると言っても過去のある時点ではそれが存在したことは事実であり，このことがアマレテの環境利用システムの中でいかなる位置を占めたのかを明らかにしなければ，アマレテの環境利用システムの解明は不十分である。

これから将来にむけて行なわれなければならない調査は，より個別の具体例を集めることによって，本稿においてはしばしば一般的な形で述べて来たアマレテ環境利用の諸側面をより具体的に例証する作業と，アマレテの変遷を歴史資料に基づいて明らかにする作業であろう。そのうち，アマレテの変化に大きな影響を与えている農地改革についての調査が重要な部分を占めるのは当然であろう。

謝　　辞

筆者のアマレテ調査は，多くの方々の親切な御助力によって支えられ，やっと本稿の作成にまでこぎつけることが出来た。調査団のメンバーである国立民族学博物館の友枝啓泰助教授，藤井龍彦助教授，山本紀夫助教授には，調査地においてもまた帰国した後にも数多くの助言をいただいた。アンデス調査の経験豊富なこれらの方々の御助力なしには調査を行なうことは不可能であった。まず記して感謝を捧げたい。

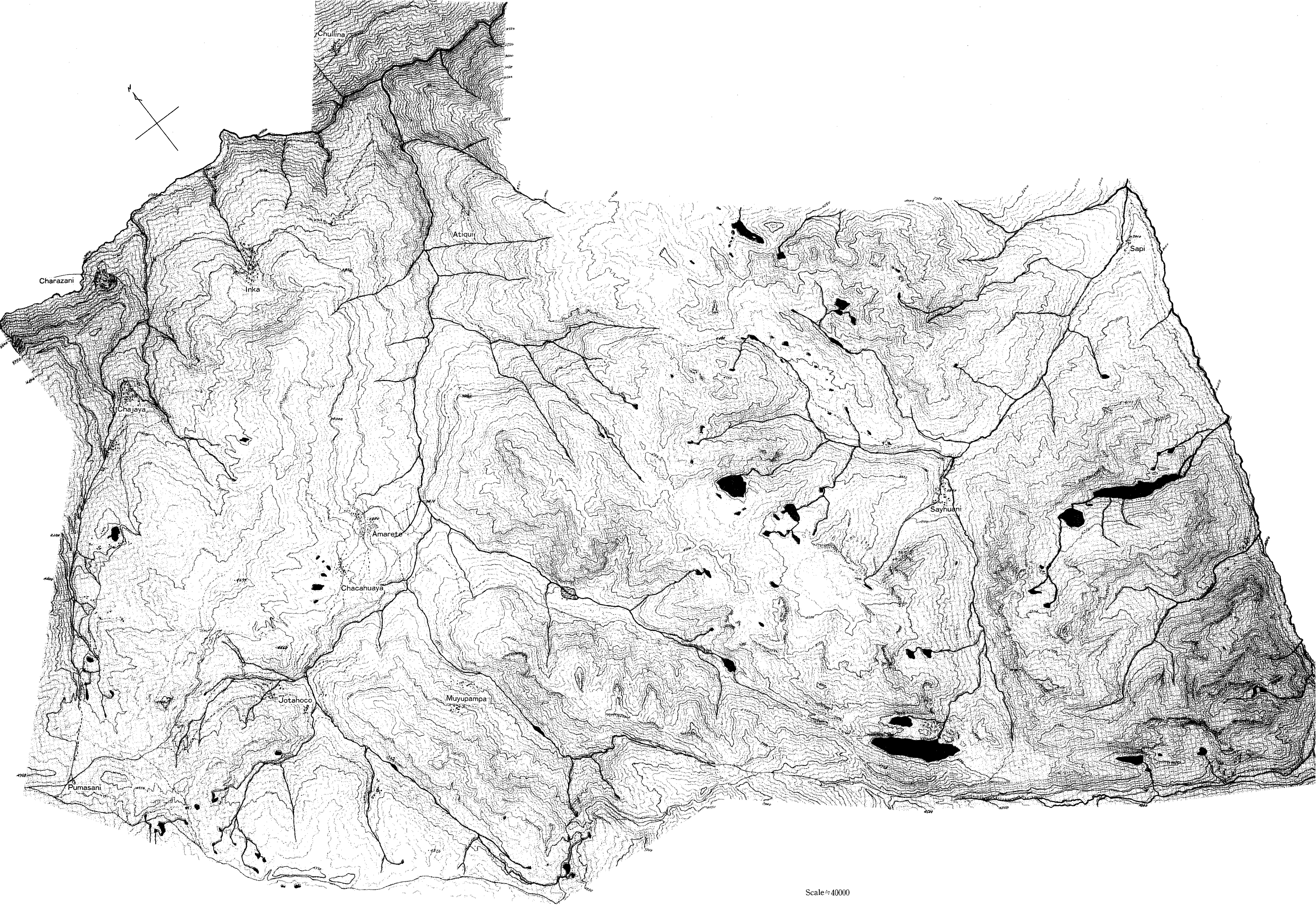
またアマレテに一緒に住み込んだ東京都立大学大学院の原毅彦さん，通訳としてまた共同調査者として協力してくれた Diogenes Yúgal 氏，Ruth Flores 嬢の公私にわたる御助力に対して，また調査団のためにいろいろ御骨折り頂いた国際協力事業団の浅野寿夫さん，地図を作成して頂いた国際航業の木俣恒男技師長，坂本荘太郎部長，大山充課長，調査に協力して頂き有益な情報を数多く寄せて頂いたアマレテのみなさんにも感謝の意を表したい。

最後に本稿の一部は，国立民族学博物館の共同研究会「アンデス・ヒマラヤ・アルプス――交換と交易――」および第38回日本人類学会・日本民族学会連合大会において発表した。有益なコメントを多数頂いた共同研究会のメンバーの方々にも感謝する。

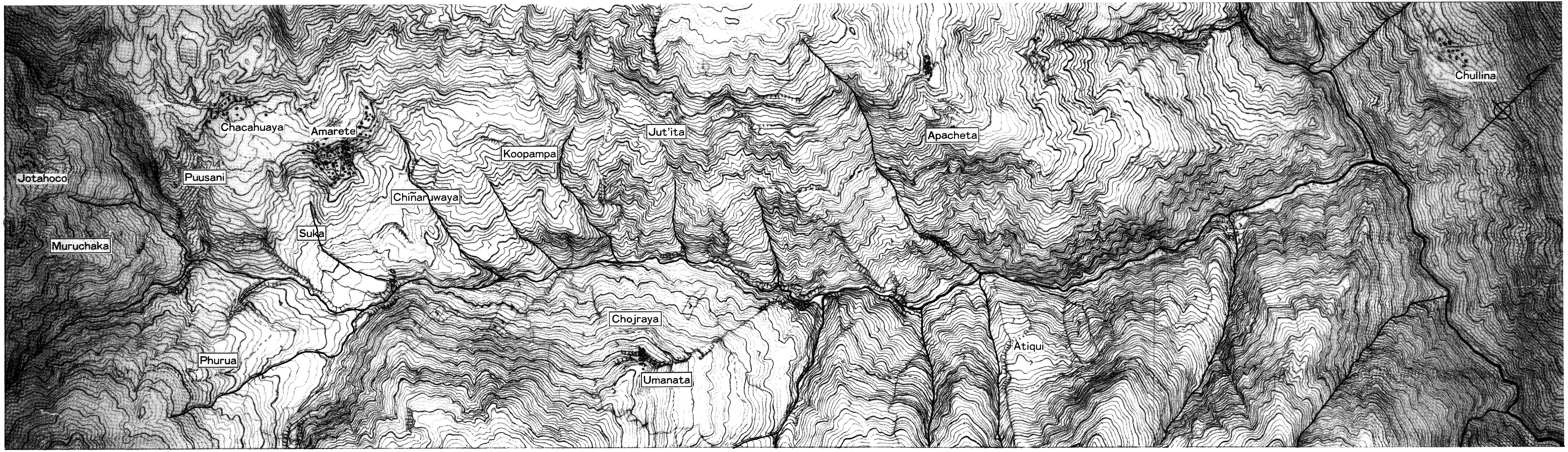
文　　献

Bastien, Joseph W.
1978 *Mountain of the Condor: Metaphor and Ritual in an Andean Ayllu.* St. Paul: West Publishing Co.

BRUSH, Stephen B.
1977 *Mountain, Field, and Family: The Economy and Human Ecology of an Andean Valley.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
CARTER, William E., and Mauricio MAMANI P.
1982 *Irpa Chico: individuo y comunidad en la cultura Aymara.* La Paz: Juventud.
FUJII, Tatsuhiko and Hiroyasu TOMOEDA
1981 Chacra, Laime y Auquénidos—Explotación Ambiental de una Comunidad Andina. In Shozo Masuda (ed.), *Estudios Etnográficos del Perú Meridional*, Tokio: Universidad de Tokio, pp. 33–63.
GISBERT, Teresa *et al.*
1984 *Espacio y tiempo en el nundo Callawaya.* La Paz: Universidad Mayor de San Andrés.
INSTITUTO FRANCES DE ESTUDIOS ANDINOS (IFEA)
1980 *Ambana: tierras y hombres (Provincia de Camacho, Departamento de La Paz—Bolivia).* Lima: Travaux de L'Institut Français d'Etude Andines, Tome XXI, Volume 1.
MANKHE, Lothar
1984 Formas de adaptación en la agricultura indígena de la zona de los Callawayas. In Gisbert *et al.*, *Espacio y tiempo en el mundo Callawaya*, La Paz: Universidad Mayor de San Andrés, pp. 59–71.
MURRA, John
1972 El "Control Vertical" de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In Iñigo Ortiz de Zúñiga, *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562*, Tomo II, Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizán, pp. 429–476.
OBLITAS POBLETE, Enrique
1978 (1963) *Cultura Callawaya.* La Paz: Ediciones Populares Camarlinghi.
大貫良夫
1978 「アンデス高地の環境利用——垂直統御をめぐる問題——」『国立民族学博物館研究報告』3(4): 709–733.
友枝啓泰
1983 「雄牛とコンドル——高地アンデス農民の祭と社会——」『社会史研究』2: 165–220.
山本紀夫
1976 「中央アンデスの凍結乾燥イモ，チューニョ——加工法，材料およびその意義について——」『季刊人類学』7(2): 169–212.
1980 「中央アンデス南部高地の環境利用——ペルー，クスコ県マルカパタの事例より——」『国立民族学博物館研究報告』5(1): 121–189.



地図2　アマレテおよびその周辺



地図3　アマレテ谷主要部